

『ショレの赤いハンカチ』由来考（Ⅱ）

Sur l'histoire du Mouchoir rouge de Cholet

—*Suite et fin*—

付 Th. Botrel et P. d'Anjou : Le mouchoir rouge,
épisode de la Chouannerie 1793 (Drame en 1 acte)

西 節 夫

第四章 史実の物語化——その2

本章では、先に取り上げたフランソワーズ・ド・シャボのアンリ伝とは対照的な、いわゆる小説風の伝記である Baron de La Tousche d'Avrigny: Monsieur Henri Henri de La Rochejaquelein 1772—1794, Emile-Paule, 1948 において、「アンリとショレの赤いスカーフ」のテーマがどう扱われているかを見よう。いささか長くなるが、同書で、このテーマに直接関係する部分を紹介すると、以下の通りである。第一行目の ce champ de bataille はフォントネーの戦場を指すが、なぜカラ・トゥーシュはその日付を 1793 年 5 月 23 日としている。しかし、1793 年 5 月 16 日のフォントネー攻略戦に完敗したヴァンデ軍が、再度同じ戦場でシャルボ麾下の共和政府軍とまみえて、ついにヴァンデ県の県庁所在地を陥落させたのは、ラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人『回想録』やシャボのアンリ伝が記しているように、それから 9 日後の 5 月 25 日というのが定説である、というよりも確定している⁽¹⁾。

C'est sur ce champ de bataille que pour la première fois M. Henri apparut la tête enveloppée d'un de ces larges mouchoirs rouges à stries blanches, qui constituaient alors la principale industrie de Cholet. Un autre enserrait sa taille, un troisième flottait à son cou. Bonchamps le dévisagea de la tête aux pieds. Il avait vite discerné la précoce valeur d'Henri. Ses imprudences le navraient. Henri reçut une semonce. Elle ne devait pas être la dernière, car il était têtu dans ses dangereuses originalités. Ne pouvant lui faire lâcher ses mouchoirs, Bonchamps le plaça derrière lui avec la cavalerie, à la

réserve destinée à achever la dérouté de l'ennemi.

Les mouchoirs n'en eurent pas moins le succès souhaité. «Tirez sur les mouchoirs rouges!» criaient les cavaliers de Chalbos. Henri vivait dans un enivrement. Les dernières lignes ennemies se disloquaient dans une panique affligeante, il poussa son cheval vers un officier du 18^e Chasseurs pour s'offrir un combat singulier. L'officier culbuta avec sa monture en venant à lui. «Rendez-vous, je vous promets la vie sauve!» Pour toute réponse, l'officier déchargeait sur son adversaire ses pistolets d'arçon, sans l'atteindre, d'ailleurs, et le manquait encore avec ses pistolets de poche. Farouche, il les jeta par terre en lançant au jeune homme: «Je me suis satisfait; satisfais-toi maintenant.» «Eh bien, ma satisfaction est de te laisser vivre.» Et tout souriant, Henri éperonna son cheval vers un autre ennemi.

Pendant ce temps, Bonchamps tombait dans les rues de Fontenay grièvement blessé. D'Elbée était déjà hors de combat, Henri fut supplié de quitter son accoutrement. Il objecta que le mouchoir qu'il mettait en guise de ceinture, lui était commode pour passer ses pistolets. «Mais vous vous ferez reconnaître!» «Les bleus me reconnaîtraient de toute façon!» Alors les cavaliers:

Pour sauver celui-là qu'ils nommaient l'Intrépide

Attirèrent la mort sur eux.

Sous le feu, chacun prit, dans sa petite veste,

Dans ses braies de toile ou son bissac de peau,

Un mouchoir de Cholet, un mouchoir rouge, et preste,

L'attacha sur son grand chapeau.

Et les bleus, ébahis de voir à la seconde

Tant de chefs qui s'offraient au feu de leurs flingots,

Cherchaient en vain l'épi de blé, la paille blonde

Dans ce champ de coquelicots.

L'enfant qui avait de grands yeux où rayonnait son âme,

Un front pur, qui avait vingt ans, des cheveux d'or,

Qui était doux et bon, tendre comme une femme

Brave comme un campéador.

Seulement, cet accoutrement, écrit la Marquise de Lescure, leur donna tout à fait «l'aspect de brigands»*

Au soir de Fontenay, Henri ne pensait plus à ses mouchoirs...

* L'un de ces mouchoirs est conservé au château de Clisson⁽²⁾.

一読して、「アンリとショレの赤いスカーフ」物語の観のあるこの記述について、粗筋を追いながら、主として史実との対比という視点から検討してゆくことにする。

ラ・トゥーシュは、アンリが赤いスカーフを着けたのはフォントネーの戦いが最初だったと、強調構文で明記することからこの叙述を始めている。一方、ラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人『回想録』のL版、B版の証言が、どちらもアンリはそれ以前から赤いスカーフを着けて戦いに臨んでいたと読まれることは前章末で指摘した通りであって、この設定は、個人の生涯

に関する歴史家としてのそれではなく、物語の語り手としての伝記作者の巧みにほかならない⁽³⁾。いうまでもなく、「アンリとショレの赤いスカーフ」のテーマを時間的にも場所的にもフォントネーの戦場に集中させるためである。

しかも、ここでは、その赤いスカーフは「当時ショレの主要な産業となっていた、あの赤地に白筋の入った幅広のスカーフ」だったと具体的に述べられている。「赤地に白筋の入った幅広のスカーフ」とは今日ショレで見られるもの、すなわち、第二章で紹介したように、ショレ市観光協会版由来書によれば、ボトレルの『ショレの赤いハンカチ』の成功にあやかりうとして、おそらく20世紀に入ってから、レオン・マレという地元の織物製造業者が創作したはずのスカーフ——赤色はヴァンデの反徒たちの血を象徴し、白色は共和政府軍に容易に屈しなかった王党軍の思い出を永遠化しようとしたものという——とまさに同じものであって、この伝記作者によると、それがすでに当時から大いに生産されていて、アンリをはじめヴァンデの反徒たちが愛用していたということになる。

しかし、ショレ市観光協会版由来書が大前提において作為性のあるものとはいえ、ショレの地場産業史にかかわるラ・トゥーシュの記述もまた事実反した、明らかなアナクロニズムであると断定せざるを得ない。ショレ市の文化財保存担当官で、同市の織物博物館のおそらく実質上の責任者であるロワール＝モンガゾン女史によると、「今日われわれの知る、赤と白という高度に象徴的な二色織りの有名なハンカチの着想」を、レオン・マレがボトレルの歌から得たこと自体に疑問の余地はないのであって、大革命前のショレのハンカチはそもそも白地が主流であって、「確かに赤を基調にしたハンカチも存在したが、それがショレ産の主要製品であったとはまず考えられない。それは赤糸よりも白糸のほうが得やすかったという、

単純明快な理由による」のである⁽⁴⁾。

ラ・トゥーシュの明白で大胆なこのアナクロニズムが、20世紀もすでに半ばの読者を意識した、物語の語り手としての伝記作者の巧みにほかならないことは指摘するまでもない。つまり彼は、フォントネーの戦場のアンリのいでたちを活写するのに、「ショレの赤いハンカチ」の周知性を利用したのである。あるいはさらにこの伝記作者は、やはり集中の原理によって、「アンリとショレの赤いスカーフ」のテーマにまつわるいっさいを、フォントネーの戦場に集中させようとしているのであって、そのために彼は、ラ・ロシュジャ克蘭夫人の『回想録』からポトレルの歌へ、そしてレオン・マレの創作ハンカチへという、挿話的事実の物語化から産業化という流れをいわば逆転することによって、実際にはアンリが着けていたはずのない赤地に白筋入りのショレのスカーフに、それを内包させているのだという読み方＝解釈も可能であろう。いずれにせよ、ラ・トゥーシュによるアンリ伝の時間的な自由さを示す、もっとも顕著な事例である。

アンリのスカーフの着け場所は、一枚で頭をくるみ、一枚は腰に巻き締め、三枚目は首になびかせているのだから、L版、B版と一致し、腰に巻いたスカーフの用途もやがて部下の騎兵たちとのやりとりで分かるようにピストルをはさむためであって、挿話的事実通りである。ところが、腰に巻いたのが数枚ではなく一枚と設定されているために、枚数の点ではポトレルの歌詞のほうに合致しよう。つまりこの伝記作者は、史実に反して、というよりも史実につくのをやめて、ポトレルと同じく、三枚のショレの赤いハンカチないしはスカーフ物語のほうを選択したのである。それは単に審美的な理由によるだけでなく、三位一体というカトリックの教義に通底する選択であるに違いない⁽⁵⁾。

ラ・トゥーシュは、以上の導入部と戦闘中の出来事とのあいだに、アン

りに対するボンジャンの叱責と処置という事件を挿入している。かねてからアンリの年に似合わない勇敢さを見抜くと同時に、それが軽率さに至ることに心を痛めていたボンジャンが、アンリのその変わったいでたちを、おそらくその後もなにかくりかえされたように、頑固で危険な奇行癖のあらわれとして叱責した。しかし、それでもアンリがスカーフをとろうとしないので、ボンジャンは彼を騎兵隊とともに後陣にまわした、というのである。

このボンジャンの介入を事実とする直接的な資料はないと思われるし、ラ・トゥーシュ自身も典拠を示していない。ただし、アンリがきわめて勇敢な若者で、豪胆大将 l'Intrépide とあだ名されていたこと、と同時に、それが往々にして無謀さ、軽率さに至るのが彼の欠点の一つであったことは、ラ・ロシュジャクラン夫人も指摘しているし⁽⁶⁾、さらに当時二十歳のアンリと彼よりも十三歳年上であったボンジャンとの関係については、二人が互いに親愛感を抱いていて、アンリが偵察のために単騎同然で敵の野営地まで潜入したときにはボンジャンが叱責したという、元ヴァンデ軍兵士の証言も採録されている⁽⁷⁾。おそらくラ・トゥーシュはこの元兵士による証言内容を重視して、それを「アンリとショレの赤いスカーフ」のテーマに結びつけたのであろう。ともあれ、フォントネーの戦場における戦闘前のこの事件設定はきわめて意図的である。というのは、ラ・ロシュジャクラン夫人の『回想録』が、夫人の最初の夫であったレスキュール侯爵とアンリとの単なるいとこ同士以上の絆を強調しているのに対して、ラ・トゥーシュには、アンリとボンジャンの友愛はそれにまさるもので、ボンジャンこそアンリのメンター役であったという認識と主張があり、それがこの伝記の一貫して明らかな特色となっているからである。

いや、実は、フォントネーの戦闘前にボンジャンがアンリの赤いスカー

フを見とがめ処置したという、この設定の真の意図は他にあるのだ。それは本伝記について次のことを知れば判然とするのである。

フォントネー攻略から5か月足らずあとの10月17日に、ボンシャンはショレの大会戦で重傷を負い、ロワール河畔のサン＝フローラン＝ル＝ヴィエューに移送されるが、その翌日、自らの死と反徒たちによるロワール大渡河の直前に、彼はヴァンデ軍が引き連れていた共和政府軍捕虜全員の釈放を命じる。こうして、反徒たちの怒りの前にまさに風前のともしびであった5千余以上の人命が救われたのである。このことは「ボンシャンの赦し（あるいは慈悲）」として早くから知られた史実であるが⁽⁸⁾、ジャンリス夫人がいわば代筆したボンシャン侯爵夫人『ヴァンデ戦回想録』によると、その同じ臨終の場で、夫ボンシャンは家族の爾後を従弟とともにアンリに託したのであった。そして実際アンリが、ガレルヌの地において、ボンシャンの遺族に対して庇護者としての心くばりを絶やさなかったばかりでなく、事情の許す限り、遺族と同居し、幼い息子とベッドをともにしていたことも、やはり夫人の回想しているところである⁽⁹⁾。さらにラ・トゥーシュの指摘によれば、ラ・ロシュジャ克蘭夫人の『回想録』の原稿には、ガレルヌの彷徨中のある時期のこととして、「彼（アンリ）はボンシャン夫人に夢中になりはじめていた」と記して、抹消したあとが読みとられるという。こうした「事実」から、ラ・トゥーシュは、総司令官としてガレルヌの彷徨を指揮する運命に立たされたアンリと、いわば亡夫とアンリとの関係とは逆に、その庇護の対象となった三十六歳のボンシャン未亡人とのあいだに、あたかも遍歴の騎士と彼に選ばれた貴婦人のそのような、「きわめて清らかな恋物語」を想像する、いや、それがあったと解釈して物語化を試みているのである⁽¹⁰⁾。おそらくこの解釈自体相当に独自であって、少なくともそれを初めて提示したのは、ラ・トゥーシュの

このアンリ伝ではないかと思われるのであるが、いずれにせよ、この物語化＝プロット化において、なぜボンシャンとアンリとの「特別の友情」が強調され、そしてさらにフォントネーの戦闘前に^{くだん}件の、多分事実ではない事件が設定されたのかについては、もはや縷説するまでもないであろう。前者は肝心の恋物語に至る出発点であり、後者はその効果的で不可欠の第二ステップにほかならないのである。

ラ・トゥーシュによるフォントネーの戦闘中の記述は、三つの部分に大別される。

まず、アンリの赤いスカーフは案の定効果を發揮して、シャルボ麾下の騎兵たちが、「あの赤いスカーフを狙え」と叫んだこと。これはラ・ロシュジャ克蘭夫人『回想録』のB版が述べていることを戦史によって補足しただけの内容であって、B版との違いはスカーフが複数になっている点だけである。

次に赤いスカーフの効果と結びつけて、一騎打ち事件が語られている。すなわち、「あの赤いスカーフを狙え」という敵兵たちの叫び声に熱狂したアンリは、すでに崩壊状態に陥っていた第18獵騎兵部隊の一士官のほうへ、一騎打ちを求めて馬を進め、それに応じて近寄ろうとした相手が馬もろとも転倒すると、「降伏したまえ、命は保証する」といった。士官は返答無用とばかりに、まず鞍袋から取り出したピストルで、続いて携帯用のピストルで撃ってきたが、どちらも弾が尽きると、「おれはもうよい。こんどは君が満足する番だ」と叫んだ。するとアンリは、「おれの満足は君を生かしておくことさ」と答えて、笑いながら、別の一騎打ち相手のほうへ馬を走らせた、というのである。

これはクレティノ＝ジョリーのヴァンデ戦史などにも記されている事件であって⁽¹¹⁾、フランソワーズ・ド・シャボもアンリの赤いスカーフの話

とは別のところで、フォントネーの戦闘中の出来事として伝えているが、そこでは青の士官のほうが先に戦いをいどんできたとされている⁽¹²⁾。明らかにアンリを美化するための歪曲であって、ラ・ロシュジャックラン夫人は、「青がもう潰走状態にあるときに、時折勇気にまかせて、必要もなく、気遣いみたいに危険に身をさらす」のが、アンリの欠点であったと述べているばかりでなく、のちに『回想録』から削除したとはいえ、「彼は相手に一騎打ちの可能性を与えることなしには、一兵たりとも決して捕虜にしなかった」と、アンリに一騎打ち癖のあったことを証言している⁽¹³⁾。

したがって、ラ・トゥージュはまさに事実を記述しているのだが、ここにも巧みで重要な物語化がある。それはラ・トゥージュが、シャボとは対照的に、一騎打ち事件を赤いスカーフの効果に結びつけて語ることによって、つまり「アンリとショレの赤いスカーフ」のテーマに一騎打ち事件を導入することによって、いわば相乗効果的にアンリの奇行癖のすさまじさを描出すると同時に、その意味にまで迫ることが可能になっている、という意味においてである。

アンリの赤いスカーフと一騎打ち事件がともに彼の豪胆さを示していることはいうまでもない。と同時にこれらの奇行癖 *originalités* は、その原語のより今日的な含意通りに、抑圧された若者のつっぱり衝動に基づく行為、すなわち若者特有の自己顕示欲のせっぱづまった表現にほかならないであろう。アンリがきわめて感受性の鋭い、どちらかといえば内向型で、実に心の優しい青年であったことは諸家の一致して認めるところであるが、その彼が、年上の司令官たちに伍して、彼ら、つまり大人たちのくりかえす陰謀・内紛劇に耐えながら、やはりほとんどが彼より年長であった部下たちを率いて、日々戦わなければならなかったのである。アンリの心理がどれほどの抑圧のもとにあったかは想像を絶しよう。しかも彼は、母親の

深い愛に包まれて育ちながら、1782年にわずか十歳で陸軍士官学校の寄宿生活に入り、以後はほとんど家族と暮らすことのないまま、1791年末には父母は弟ルイを連れてはるかサント＝ドミンゴへ去っている。したがって、ヴァンデの戦いに身を投じる1年以上前から、彼には心を通わせる身内はいなかったといってよいだろう。感情生活においてまったく未熟なアンリが、最年少司令官ゆえの重圧に、抑うつを発散させるすべもないまま、懸命に耐えていたのである。そのなかで、彼がどの司令官にも負けないと自負していたのが、馬術を含めた武術と戦術、そして勇気であったとしたら、その危険な奇行癖は心理的に十分納得されるであろう。

一騎打ち事件は単にアンリの豪胆さだけでなく、彼の寛仁さを示しているよう。やがてこの豪胆さと寛容さの結びついた奇行癖が、あるいはそのなごりが二十一歳の彼の命を奪うのである。1794年1月末、アンリは追いつめた共和政府軍兵士の前に、部下が止めるのを振り切って馬を進め、立ちはだかつて降伏をすすめる。すると、相手がアンリだと知ったその兵士は、恭順をよそおいながら、彼を狙い撃ったのである。したがって「アンリとショレの赤いスカーフ」のテーマは、一騎打ち事件の導入によって、アンリの最期を予告するものとなっている、といえるであろう。

ラ・トゥーシュの叙述は、一騎打ち事件から「アンリと赤いスカーフ」事件の帰結部へと向かう。すなわち、その間に、ボンシャンは街なかで重傷を負い、デルベはすでに戦線を離脱していた。そこでアンリは、部下の騎兵たちから、異様な格好をやめるようにと懇願された。しかし彼は、バンド代わりのスカーフはピストルを差し込むのに都合がよいと反論し、さらに、「それではあなただと分かってしまうでしょう」と食い下がる部下たちに対して、「どのみち青のやつらにはおれだって分かるさ」といい放つのである。そこで騎兵たちはと、この伝記作者は、彼らがアンリの命を

守るためにとった窮余の策、つまり帰結部中の帰結というべき肝心な点については、ボトレルの『ひなげし』Les Coquelicotsという、『ショレの赤いハンカチ』とは違って、いわば名実ともにアンリを主人公にした歌にゆだねている。すなわち、あえて歌詞の筋を追えば、各自が砲火のなかで、上着やズボンのポケットや振り分け袋のなかから、急いでショレの赤いハンカチを一枚ずつ取り出して、自分たちの大きな帽子に着けた。すると青たちは、急にたくさんの指揮官が敢然とあらわれたのに啞然、「ひなげし畑に麦の穂、黄金の藁を空しく探すばかりだった。」

ラ・ロシュジャ克蘭夫人の『回想録』や戦史などによると、このフォントネーの会戦は、遅くとも午後1時頃には総攻撃の火蓋が切られて、比較的短時間で終わったと思われる。その勝敗を決したのがアンリの率いる騎兵隊の活躍であったが、ラ・トゥーシュの表現通りに「その間に」、ボンシャンがおそらく先頭を切って、フォントネーの城郭内に入り、降伏をよそおった敵兵のだまし討ちにあって重傷を負ったことも事実なら、ボンシャンよりも年長で、いわば総司令官格のデルベは、確かに、前回のフォントネー攻撃の際に受けた傷のために、この戦闘には参加していなかった。また、騎兵は士官か下士官待遇の兵であったから、「騎兵」は士官と同義語とみなされ、したがってその彼らとのやりとりの前半、すなわちアンリの第一の反論までは、commodeという形容詞の使用も含めて、明らかにラ・ロシュジャ克蘭夫人『回想録』のB版を源泉とする流れのなかにある記述であろう。さらに後半の、不敵とも自棄的ともとれるアンリのセリフで終わる応酬についても、その典拠がはっきりしている⁽¹⁴⁾。

ところが、一点だけ「史実」、すくなくともラ・ロシュジャ克蘭夫人『回想録』B版の証言と異なるところがある。それは時間を含めて、部下の騎兵＝士官たちがアンリとかけあった状況である。すなわち、B版では、

その夜、つまり戦いが終わってからであったのに対して、ここでは司令官たちが次々と倒れてゆく緊迫した危機感のなかで、戦場において、彼らの懇願が行われたことになっていよう。そして「その夜」には、先に掲げた原文の最後の一行が示すように、「アンリの念頭にはもうスカーフのことなどなかった」のであって、伝記作者の記述は別のテーマへ、アンリとヴァンデ軍の寛大さのそれへと移ってゆくのである。

この時間設定の変更が、『ひなげし』の歌詞に合わせたものであることはいうまでもない。と同時に、この変更は、冒頭の、「アンリとショレの赤いスカーフ」のテーマをフォントネーの戦場に集中させる巧みとあいまって、いわば物語独自の圧縮された時空間を生み出していよう。しかも、それはアンリの生涯を貫く時空間となっているのである。単にアンリとボンシャン未亡人との恋物語のプロットすなわちその筋立てにおいて、というのではなく、それ以上に、アンリのその後の生き方を、そしてなによりも彼の最期を予告し、いわばそこに直結しているという意味においてである。司令官の身を案じて、赤いスカーフをとるように懇願する部下に、「どのみち青のやつらにはおれだって分かるさ」といい放ったアンリは、ロワール再渡河後、落魄の姿で叔母を訪ねた折りに、彼女がせめてひげを剃るようにとすすめたのに対して、「今に鉄砲だまが剃りとばしてくれるよ。ぼくは生よりも死のほうが身近なんだから」と答えたという。実際、アンリの奇行癖の裏には、死を恐れぬというよりも、なにかに自棄的で厭世的なものが感じられるのであって、ガレルヌの彷徨のあいだに、そしてとりわけ、結果的に反徒たちを遺棄して故郷に舞い戻ってからは、それがおさえようもない死への願望に変わってゆくのが、特にこのラトゥーシュによるアンリ伝から読みとられるのである。アンリのその意識に立ち入ることはあまりに大きな問題であって、フォントネーの戦い後の彼の生き方同

様、本稿では割愛せざるをえないが、ただ、アンリの生い立ちから死の願望に至るまで、ユング派の分析家たちには格好の対象に違いないという、筆者の感懐だけは記しておきたい。

ラ・トゥーシュの語り手としての巧みといえば、『ひなげし』の挿入の仕方もそうである。『ひなげし』の歌は全11節からなっているが、彼はその一部分をそのまま挿入しているのではない。まず、第9節の後半の2行から最終節までを地の文につないで挿入したあとに、第2節を最終節として置いているのであって、しかも第2節は巧妙に改竄、いや手直しされている。すなわち、『ひなげし』の第2節第1行の *Il avait...* が *L'enfant qui avait...* に、同じく第2行の *Un front pur; il avait...* が *Un front pur, qui avait...* に、さらに3行目の *Il était doux...* は *Qui était doux...* といった具合に直されているのである。きわめて大胆な手直しといわざるをえないが、その結果、冒頭の *L'enfant* 以外は、すべてこの名詞一語の従属節と化した最終節が、単に前節3行目の「麦の穂」と「黄金の葉」という比喩のいわば受け皿となっているばかりでなく、地の文から続く「アンリとショレの赤いスカーフ」事件の帰結部全体を、合唱詩の高揚のうちに見事に収斂させていよう⁽¹⁵⁾。

伝記という物語のこの奔放な語り手は、いわば合唱詩的性格の濃い叙事詩的歌謡に帰結をゆだねることによって、「アンリとショレの赤いスカーフ」事件を終えている。しかし、彼にとって、「アンリとショレの赤いスカーフ」物語はまだ完結していないのである。彼は巧妙に手直した『ひなげし』の歌とともに、きわめて完結性の強い次元に高揚・飛翔したあと、事実性のかかしを必要とする伝記の次元に急落下する。すなわち、この伝記作者はレスキュール夫人の言葉として、「ただし、赤いスカーフを着けた騎兵たちはいかに《山賊風》だった」と述べていよう。さらに彼は、

「そのスカーフの一枚がクリッソンの城館に保存されている」と注記することで、虚構の世界を現実結びつけようとしている。実際、この注記こそラ・トゥーシュの「アンリとショレの赤いスカーフ」物語を完結するものであるが、それにしてもなんと奇妙な注記の仕方であろう。アンリがロワールを再渡河したあと、その鞆に残っていたスカーフの一枚を、当時のレスキュール未亡人がブルターニュ潜伏中に愛用したこと、そしてアンリの弟ルイと再婚した際、それを彼に贈ったことは第二章で紹介したが、確かに『回想録』のその箇所には、件のスカーフがレスキュール家のクリッソンの城館に保存されている旨の注が付されている⁽¹⁶⁾。しかし、ラ・トゥーシュの注の付け方では、アンリをまねた騎兵たちの着けたスカーフの一枚とも解されるし、いやそのまえに彼が「三枚のスカーフ」物語を選択したことを考えれば、違和感と戸惑いを禁じえない注記であろう。

第五章 戯曲『赤いハンカチ』

ボトレルは、ピエール・ダンジュールとの合作で、『赤いハンカチ』という一幕物の戯曲を残している。16折りで24頁の、その刊本の扉に記されている題名、発行所等は次の通りであって、イーヴ・ヴァション編集の書誌⁽¹⁷⁾によると、出版されたのは1946年である。Théodore Botrel: Le mouchoir rouge Episode de la Chouannerie (1793) en un acte, reconstitué et complété par Pierre d'Anjou, Paris, Le Liseron, 25, rue de l'Echaudé

この文字通りの小ドラマは、題名からして、ただちにボトレルのヒット曲との関連を思わせるが、おそらくもっとも興味深いのは、ヴィクトル・ユゴー『九十三年』Quatrevingt-Treizeとのつながり、類似であろう。そこで、あえて本稿の一章を割いて紹介する次第であるが、二つのことを

断っておきたい。第一点は、戯曲『赤いハンカチ』の本文は本論稿の最後に掲載することにして、ここでは各場を要約する形で梗概を記すにとどめること。第二点は、断るというのは不適切な表現かもしれないが、第十四場で「幕」となっているこの刊本戯曲には、なぜか第八場と第十二場がなく、しかも、テキスト内容と頁数に関してはまったく欠落がないという、まことに不可解な事実のあることである。もちろん単なるミスプリントとは考えがたいのであって、筆者は首をかしげるばかりである。

『赤いハンカチ』一幕ドラマ(梗概)

舞台は1793年のブルターニュ、ケルヌヴェ城館の大広間。壁にはケルヌヴェ家代々の先祖の肖像。正面大扉の左側に、下部を半ば大きな白旗でおおわれたルイ十六世の肖像、右側には大きな窓とのあいだに、当主ケルヌヴェ侯爵の嫡子であるアラン・ケルヌヴェ(25歳)の肖像。いたるところに防柵が施されている。遠くで戦闘の音、次第に聞こえなくなる。

第一場

夕暮れ。舞台中央、やや右寄りのテーブルで、何通かの手紙に目を通していたケルヌヴェ侯爵(60歳)が、手紙から目を離して、窓際で刺繍をしている娘イヴォヌヌ(20歳)に向かい、ふくろう党員たちの善戦ぶりに対する感嘆の言葉をもらす。そして、もう目がよく見えないから、代わりに読んでほしいと、彼女に一通の手紙を渡す。それは甥のジョルジュ(25歳)からのもので、政治思想の違いから久しく会わずにいたジョルジュの父、つまり侯爵の弟の死を知らせると同時に、近くそちらのほうにゆくので、ご挨拶に伺うのを許してもらいたいという文面だった。侯爵は、娘が読みあげた手紙を破りすてながら、「背教者で国王を裏切った弟の死など悼まない」といい、さらに、「志願して共和政府軍に入り、姓までフ

ランス風に Villeneuve と変えてしまった甥になど会わない！ きゃつは、デュ・ゲクランの傍らで、あるいはフランソワ一世やアンリ四世の下で戦った先祖たちの面汚しだ！ ましてや、今、アランはふくろう党员たちの先頭に立って戦っているのだぞ」という。イヴォンヌはその父をなだめながら、これまでいえないでいた秘密をはじめて口にする。4年前、つまり1789年の夏に、兄の幼なじみだったジュルジュから愛を告白されて、自分も好意を抱いていると伝えた、だからあの一とは自分に会いにくのだと。「今も愛しているのだろう」と侯爵が問い詰めたとき、ふくろう党员たちの合図の口笛が聞こえる。

第二場

ふくろう党员たちが、胸部に瀕死の重傷を負ったアランを運び込む。イヴォンヌはアランのマントと帽子を脱がせて、テーブルの上に置いてから、彼を舞台やや左手の大きな肘掛け椅子に座らせる。アランは「自分はまもなく死ぬが、皆は国王の復帰と真の僧侶たちの復権のために生きるべきだ」といったあと、足もとにひざまずいている妹に向かって、「ぼくも生きたかった……いつか君の子供たちに、ぼくの墓を花で飾ってほしい、ぼくが寂しくないように」と頼む。そして、侯爵がルイ十六世の肖像からはずしてきた白旗の、百合の紋様に接吻し、白旗を抱き締めたまま「国王……万歳！」と叫んで息絶える。悲しみに毅然と耐えて、「国王万歳だ、諸君」と叫ぶ父に対して、イヴォンヌは『深き淵より』を歌い始め、ひざまずいたふくろう党员たちが唱和する。そのときに大扉を叩く音。侯爵は遺体を礼拝堂に運ぶように命じ、ふくろう党员たちの何人かが遺体を担架に乗せて上手に去るが、イヴォンヌは父侯爵が兄の遺体に掛けた白旗を取って、それで兄の肖像画をおおう。扉を叩く音が激しさを増す。

第三場

小さなのぞき窓に顔を寄せたイヴォンヌが、はじかれたように後ずさりする。扉の前には、ジョルジュらしい。外は激しい風雨。絶対に扉を開けるなという父に対して、イヴォンヌは、「あの人は誤りを告白してきたのかもしれない」と説得して、扉を開けさせる。

第四場

ジョルジュ・ヴィルヌーヴが入ってくる。大きなマントに身を包んでいるが、右手には三色の羽飾りのついた軍帽をもっている。侯爵の命令でふくろう党員たちは出てゆくが、なかの一人がジョルジュの顔をしげしげと眺めたあと、侯爵のほうへもどりかける。が、そのまま去ってゆく。

第五場

侯爵、暖炉の大きな枝付き燭台に火をともし、テーブルの上に置く。ジョルジュとの握手を拒みながらも、彼に席をすすめるが、ジョルジュは立ったままである。ジョルジュがイヴォンヌの手に接吻しようとする、侯爵がはげしく二人を突き放す。イヴォンヌは父のキリスト教徒としての美德に訴えようとするが、侯爵はジョルジュの求める祝福を拒否し、さらに、ジョルジュのマントの下からのぞいている共和政府軍の軍服を見て激昂する。それに対してジョルジュは、「これは一党派の制服ではなく、フランスの息子たちのものであり、尊敬されるべきだ」と反論したあと、同胞間の戦いがいやだから、国境の部隊への転属を願い出、その許可がおりたところだといいいながら、革命暦2年霜月10日(1793年11月30日)付けの東部軍への転出命令書を見せようとするが、侯爵はそれを押しもどす。ジョルジュは遠い任地への出発に先立って、叔父の祝福を望んだのであった。彼は、今度はイヴォンヌに向かって、自分が国家の敵を打ち破って帰ってくるまで、彼女の愛が変わらぬようお願いしてきたというが、それを聞いて、侯爵の怒りは頂点に達する。そこへ、ふくろう党のかしらが緊

急の用があるといって入ってくる。

第六場

ふくろう党のかしらがジョルジュの鼻先に松明を突きつけ、入り口を見張っている部下たちにジョルジュの顔を見させる。「間違いなく、こいつです」という返事を聞くと、かしらは侯爵に向かって、「夕暮れどきに青の一隊を待ち伏せして戦ったが、その際にアンリ殿を撃ったのはこの士官です」という。ジョルジュは「その通りだ。だが、アランとは知らなかった」と、落ち着いて答える。侯爵は、「殺せ」と迫るふくろう党員たちを、「わが家にのがれてきた者には手を出してはならん」と押しとどめて、ジョルジュの武装解除だけを認める。侯爵は涙をぬぐいながら息子の名をつぶやき、ジョルジュのピストルとサーベルをテーブルの上に置くと、ふくろう党員たちに席をはずさせる。イヴォンヌは肘掛け椅子に泣き崩れたままである。

第七場

侯爵は、「不運」のせいにしようとするジョルジュの弁解にとり合わず、「出てゆけ！」「おまえの手は永遠に息子の血で汚れたままだ！」「悔悟ももはや手遅れだ」という。そして娘に、「アランのために祈りにゆこう」と誘う。イヴォンヌはすすり泣きながら、よろよと立ち上がる。ジョルジュはその膝にとりすがって哀れみを乞うが、彼女は「近寄らないで！」と厳しくいう。さらにジョルジュが、「あなたの愛だけがぼくをなおこの世に引きとめうるものであって、もしあなたに赦してもらえないのなら、人生など意味はない！」と、二人の愛に希望だけは残しておいてくれるように懇願するのに対して、イヴォンヌは、兄の肖像の前に立ちながら、「それはできないこと！ アランだって愛したかった、生きてかったのよ。これから先、わたしたちのあいだには永遠に、血にまみれて死んだアラン

がいるのよ。さようなら！」といい、涙をふいていたハンカチを落としたまま、上手のドアから逃げてゆく。侯爵がそのドアを閉めて去る。

第九場

ジョルジュは父娘の去ったあとのドアを叩きながら、なおも哀願をくりかえすが、ドアは閉まったままで、返事はない。絶望したジョルジュは、広間の中央にもどって、人生を呪詛する。彼の視線はテーブルの上に置かれたピストルに向かう。ためらっている様子、と、突然、そのピストルをつかみ、ゆっくりと撃鉄を起し、筒先をこめかみに向ける。が、ふと、落ちていたハンカチに気づくと、拾い上げて接吻する。「ありえないことじゃない！ いつか、多分」ジョルジュはピストルをホルダーにしまい、サーベルをさやにもどす。「それに祖国がぼくを必要としているんだ！」と、彼は独白しながら、イヴォンヌのハンカチを胸の内ポケットに滑り込ませる。そのとき、正面の大扉を押し開けて、軍曹に率いられた青の一隊が入ってくる。そして、ジョルジュの姿に驚きながらも、彼に敬礼する。

第十場

軍曹は、「ケルヌヴェ城館に隠れているふくろう党の老首領を、本日中に逮捕し、銃殺せよ」という、カンクロー將軍の命令を実行するためにきたのだった。ジョルジュはその命令書をテーブルの上にほうり投げて、ちょっとのあいだ黙っていたが、やがて、「おれ自身、その命令を実行するためにここにきているのだから、君たちは出てゆきたまえ」といい、なお責任にこだわる軍曹の要求にしたがって、彼に宛てた命令書を自ら口述しながらしたためる。「本城館にはふくろう党が多数いるから、自分なんらかの口実を設けて、当該ふくろう党員を外に出させる。よって、軍曹の一隊は正面並木道で待ち伏せし、その男に銃火を浴びせよ。男の目印は白い帽章と白い羽飾り。射殺後は反撃を避けるために、速やかに退却し、

死体は見せしめのために現場に放置せよ」「よく狙えよ」というジョルジュに、「ご心配なく。きっと仕留めますよ!」といて、軍曹は部下をひきつれ出てゆく。

第十一場

兵士たちの足音が聞こえなくなると、ジョルジュはテーブルの上から、アランの外套と白い羽飾りのついた帽子をとり、自分のマントを脱ぐ。そして、イヴォンヌの残していったハンカチをポケットから取り出すと、それに接吻し、また胸のところにもどす。次いで、アランのマントを両肩に投げかけ、彼の帽子をかぶる。イヴォンヌが去っていったドアに向かって、悲しげにキスを送り、それからゆっくりと扉のほうへ進むが、ノブに手をかけたあと引き返して、いとこの肖像に敬礼しながらつぶやく。「せめて君だけは赦してくれたまえ」そして、いきなり扉を開ける。

第十三場

すぐ近くで激しい銃撃音。ちょっと間をおいて、上手のドアから侯爵が、続いてイヴォンヌとふくろう党员たちが現れる。侯爵はテーブルの上に例の命令書を見つけて、娘に読ませる。当該人物が侯爵であることは明白だが、なんのための銃撃であるかが分からない。ふくろう党のかしらは、あの士官はアランを殺したうえに、その父上までも殺す使命を帯びていたのだと言い張り、侯爵父娘、ことにイヴォンヌは、とても信じられないことと抗弁する。彼女の「ジョルジュ! なんとか身のあかしを立てて!」という声に答えるように、扉の外で、「ぼくだ! 助けてくれ!」と弱々しい声がする。ふくろう党のかしらはあれもワナだといい、侯爵は動揺を隠せず、助けにゆこうとするイヴォンヌと言い争う。何度目かの叫び声に、ジョルジュだと知った彼女は、外へ飛び出す。そしてふくろう党员たちを呼ぶ。イヴォンヌとふくろう党员たちに支えられて、ジョルジュが姿を見

せる。顔面蒼白だが、笑みを浮かべている。

第十四場

ジョルジュは胸を撃たれていた。侯爵は、アランと同じように、彼を大きな肘掛け椅子に座らせる。しかし、一体どうしてジョルジュがアランのマントと帽子を着用しているのか？ その理由の分からない侯爵に、ジョルジュの包帯を巻き終えたイヴォンヌが、侯爵を救うために彼が犠牲になったことを説明する。彼が玄関の石段の下に倒れているのを見て、英雄的な犠牲行為であることがすぐに分かったという。侯爵はすっかり感動しながら、「ジョルジュはアラン殺しの汚名をすすぎ、わが一族にふさわしい人間であることをわしに示すために、自らを犠牲にしたのだ」という。ジョルジュはその言葉にうなずきながらも、「イヴォンヌにアランを故意に殺したと思われたくなかった！ アランを兄のように愛していた」といい、変わらぬ愛を告げるイヴォンヌに、苦しそうな笑みを浮かべながら、「信じていたよ。でも、アランがぼくたちのあいだにいた。だから犠牲が必要だった。ぼくたちの愛よりも自分が犠牲になるほうをえらんだのだよ」と心の内を伝える。侯爵は相変わらず、ジョルジュが真のケルヌヴェ家の一員であったことだけに感嘆しながら、ジョルジュの求めに応じて祝福する。「わが息子よ！」ジョルジュは、泣き崩れるイヴォンヌの髪を撫でながら、「泣かないで……ぼくは家族を、父を、婚約者を再び見出して、幸せな思いで死んでゆくのだから」という。侯爵が、アランの肖像にかけてあった白旗を、ジョルジュに接吻させようともってくる。するとジョルジュは、「ぼくの旗は三色だ」といい、イヴォンヌの青色の三角肩掛けをはずして白旗にくっつける。さらに「もう一色足りない」といって、胸のところを探り、血に染んで見事な赤色になったイヴォンヌのハンカチを取り出し、それを青い肩掛けの横に置いて微笑する。そしてイヴォンヌの手

にうやうやしく接吻し、体を起こして即製の旗を振り、「フランス万歳」と叫んで、その三色の布地のなかに崩折れる。

幕

この戯曲はさまざまな意味で興味を引くに違いない。メロドラマとして、ふくろう党ものとして、また書かれた、あるいは出版された時期（指摘するまでもなく、第二次大戦の終了翌年である）の政治・社会状況との関連において、さらにポトレルの肝心の歌のほうの『ショレの赤いハンカチ』との関係において等々。しかし、先にも述べたように、筆者にとって特に興味深いのは、1874年に出版されたユゴー最後の歴史小説である『九十三年』との類似であって、それはとりわけ大詰めの上場と、そこに至る筋立てにおいて歴然であろう。

『九十三年』の主人公である共和政府軍の青年指揮官ゴーヴァンは、かつての師で、今は彼のお目付け役として国民公会から派遣されてきたシムールダンに、「捕虜にした三百人の農民をなぜ銃殺させなかったのか」と問われて、「それは、ボンシャンが共和政府軍の捕虜を救ったから、共和政府軍も王党軍の捕虜を救すと、いわれたかったからです」と答える。しかし、ブルターニュの王党派の首領で、ふくろう党を率いているラントナック侯爵だけは、自分の大伯父とはいえ、決して赦さないと約束する。ところが、共和政府軍の物売り女の三人の子供を人質にして、ゴーヴァン家の城の塔にたてこもったラントナックが、子供たちを閉じ込めたまま火炎に包まれた塔から、いったんは無事に逃げおおしながら、狂乱した母親の絶叫を耳にすると、ふたたび塔にもどって、火炎のなかから子供たちを救い出し、自ら共和政府軍の捕虜になるのである。王党思想の権化で、信条のためには冷酷無比と思われた老侯爵のこの変貌によって、革命的絶対

の上に人間的絶対のあることを知ったゴーヴァンの心は動揺する。侯爵は、翌日には、シムールダンが運ばせた断頭台にのぼる運命にあった。午前二時、懊悩と躊躇の末に、ゴーヴァンは地下牢を訪ねる。そして、着用してきた指揮官用のマントを侯爵の肩にかけてやり、同じく金モールのついたフードをまぶかにおろしてやると、哨兵詰所の士官に「おれが出たら、扉をちゃんと閉めておけよ」と叫ぶなり、啞然としている侯爵を牢の外に押し出すのである。こうしてゴーヴァンは大伯父老侯爵の身代わりとなって、シムールダンによる軍事裁判を受け、断頭台にのぼるが、シムールダンもまた、彼の愛弟子である以上に、精神的な息子であった主人公の処刑を見とどけると同時に、自害する。

この『九十三年』に、ボトレルの戯曲がいかにも似ているかについては、上記のような筋立てにおけるゴーヴァンとラントナックの関係が、ジョルジュとケルヌヴェ侯爵とのそれにいわば移しかえられていることを指摘すれば足りる、と思われるが、さらにジョルジュが最終場で「フランス万歳」と叫んで絶命するように、断頭台上のゴーヴァンの最後の叫びが「共和国万歳！」であることも、明瞭な対応点としてあげておこう。

確かに、戯曲『赤いハンカチ』は『九十三年』のきわめてメロドラマ的翻案ものであるに違いないが、ここでまずボトレルとユゴーの関係を、もっぱら前者の『回想』によって見てゆくことにする。なぜなら、ユゴーのボトレルに与えた影響は、『赤いハンカチ』と『九十三年』との類似がうかがわせる以上に大きく、しかも、疑問の余地がないと思われるからである。

ボトレルは1895年9月に芸術酒場《黒犬》Chien-Noirの、いわば正式の歌手手となり〔本論文(Ⅰ)で、ボトレルが歌手としてデビューし活躍した芸術酒場を、《黒猫》と述べたのは《黒犬》の間違いであった。あ

まりに明白で軽率な誤りゆえ、本文中で訂正しておく⁽¹⁸⁾], 1898年に、彼の一大ヒット曲である『パンポールの女(ひと)』を収めた歌謡集『わが里の歌』Chansons de chez nousが刊行され、たちまち版を重ねるにいたって、シャンソニエとしての人気を確かなものにした。そのとき「彼は、シャンソニエとしてほどではなかったが、劇作家ならびに俳優としても知られていた」といわれる。実際、ポトレルの『回想』は、その早熟な演劇少年ぶりと、初期の「自由劇場」に無料出演の端役として参加するなど、シャンソニエとしての名声にかくれて、おそらくそれまでは、ほとんど知られていなかった演劇活動の時期があったことを明かしているが、ポトレル少年の演劇熱をかきたてたのは、いや、そもそもその情熱をめざめさせたのはユゴーであったと思われるのである。

1882年、14歳の頃、代訴人事務所の走り使いにやとわれたポトレルは、未来の司法家たちの演劇・文学論議を通じてユゴーを、正確にいえばその名前を初めて知っている。そこでポトレルが、ユゴーとともにやはり初めて知ったのはモレアス、ルコント・ド・リール、ヴェルレーヌ、スユリー＝ブリュドム、マラルメ、ドーデ父、デュマ息、それにサルドーとアンリ・ベックであったが、彼は司法家の卵たちが話題にしたこれらの作家たちの作品を、以後4年のあいだに、区立図書館を利用して「ほとんど全巻」読み切ったのであった。そればかりでなく、書生たちの談論に自分の教育のたよりなさを思い知らされた彼は、夜学に通いはじめて、なかでも朗読と朗唱法の授業に熱中するのである⁽¹⁹⁾。その授業で、教材の一つとして、ユゴーの数編の詩が用いられたこと、また担当の教師がユゴーの『王は楽しむ』Le Roi s'amuseの道化役を演じるために生まれてきたような男で、その演技に負けまいとして練習に夢中になったことも、彼はユーモアまじりに明かしているが⁽²⁰⁾、いずれにせよ代訴人事務所で働く

ようになってから、ポトレルは急速にユゴー熱にとりつかれたに違いない。代訴人事務所の所長がコメディール・フランセーズの代訴人をつとめていた関係で、古典劇やポーマルシェ、ミュッセの傑作を観る機会には何度か恵まれたが、「わたしの最高の夢はいつかユゴーの作品が上演されるのを観ることだった」と述べているからである。「そしてその夢が1883年か1884年に実現された」のであった。ポトレル少年は、そのどちらかの年の7月14日に、コメディール・フランセーズで無料公演された『リュイ・ブラス』Ruy Blasをオーケストラ席で観ることができたばかりか、思いがけなくユゴー本人が姿を見せて、観客の熱烈な喝采に老文豪自身も涙を流しながら、ゆっくりとキスを返す様子をまのあたりにして、彼は興奮と感激の極みを味わうのである。それからほどなくして、ポトレルはユゴーに、ただし死の床のユゴーに再会している。彼は、「十五歳のときに大胆にも設立した、小さな芸術協会である《文学家族》La Famille Littéraireの会長の資格で」、ユゴーの棺の前を進んだのであった⁽²¹⁾。

ポトレルは十一歳半ばで修道会経営の学校の小学課程を終えているが、そこで知り合ったごく少数の仲間に呼びかけて作ったのが《文学家族》で、この結成も、若き日のユゴーのセナークルに刺激された可能性があろう。彼はこの《文学家族》で演劇活動を開始する一方、おそらくほとんど同時期から、サン＝トージュスタン同窓会 l'Amicale des anciens Elèves de Saint-Augustinでも劇を手掛けるようになる。すなわち、彼はこの同窓会のほうで、「とりわけ多くの娯楽ものの上演を企画して、舞台監督、演出家、主演俳優の三役を同時にこなした」のであった。しかしまもなく、「いわゆる教区の青少年クラブものである伝統的な劇」、「この種のいささか刺激のとぼしい文学」に飽いた彼は、「たくさんの、より近代的な戯曲を、女性の登場人物をいっさい出せない自分たちの小舞台向きに、翻案す

ることをはじめた」のである。彼は『回想』のなかで、この勝手な改竄の対象になった作者たちにそのことを詫びながらも、次のように述べている。

「しかし、そのおかげで、巧妙な伏線、軽快で無駄のない対話、役者の自然な登・退場、各幕末のどんでん返し、といったものの秘密に通じるようになった。要するに、自分自身でもこの仕事をやってみたい気にさせられたのだ……そして私は劇作家になったのである」と⁽²²⁾。

あこがれのユゴーも、当然、この少年劇作家の翻案・改竄の対象になった。彼はユゴーの韻文戯曲である『マリオン・ドロルム』Marion Delorme の上演を観たあとで、『短刀』le Poignard を《でっちあげた》」ばかりでなく、『九十三年』を読んでいるあいだに、『老ふくろう党员』le Vieux Chouan を作った」のであった。ポトレルは前者、すなわち『短刀』については、主役を演じた最初の上演で、熱狂のあまり劇中の出来事を現実と錯覚した女性ファンのために、肝心の大詰めが哄笑の渦に包まれて、十六歳の彼には收拾のすべもなく終わったいきさつまで回想し、また、この翻案ものは「今でも始終上演されている」と、いわば注記さえしている⁽²³⁾。しかし一方、『老ふくろう党员』については、少なくとも彼の『回想』による限り、知りうるのは上記の事実だけである。

ちなみに『九十三年』は出版後7年で劇化されて、1881年12月28日にゲート座で初演されているが、ポトレルが『老ふくろう党员』を作った時点でそれを観ていないことは確かとはいえ、果してその後も『九十三年』を観劇する機会はなかったのかどうか。その点についても、彼の『回想』からはまったく知りえないのである。

ともあれ、ポトレルが、戯曲ではなく小説の『九十三年』を、あえて翻案して劇化しようと思いついた理由は、十分に納得されるであろう。まずなによりも『九十三年』が故郷ブルターニュを舞台にしたふくろう党もの

であったことで、もちろんその人道主義もポトレルの心をとらえたに違いない。と同時に、『九十三年』のもっているユゴー独自のドラマ性は彼の目を見張らせたであろう。実際、『九十三年』は、ポトレル少年が、多くの近代的な作品を翻案することによってその秘密に通じたという、巧妙な伏線からどんでん返しに至る劇的な巧みを、すべてそなえている小説だからである。

しかし、もう一つ、彼を『九十三年』の翻案・劇化に踏み切らせた、重要な理由があったに相違ない。それは、『九十三年』が「男の小説」Roman d'hommesであったことである。『九十三年』は恋の情熱とはまったく無縁の小説であって、それが先行したふくろう党ものの代表的な作品である、バルザックの『ふくろう党』Les Chouans (1829)を特に意識したユゴーの、ためらいながらの決断によることは、ユゴー研究者の指摘している通りであろう⁽²⁴⁾。バルザックが『ふくろう党』において、ふくろう党の若き首領であるモントーラン侯爵と、彼を亡き者にするためにフーシェの送り込んだヴェルヌイユ嬢との、明日なき恋を中心的なテーマとして描いたのに対して、ユゴーは明らかにそのことを意識して、恋の情熱の代わりに母性愛を選び、それを「ボンシャンの赦し」と同じように重要で⁽²⁵⁾、しかもより以上に決定的な筋立ての要因にしたのである。その結果、まさに男性だけがドラマの主要人物となっている『九十三年』は、舞台に女性役を登場させてはならないという制約のあった少年翻案劇作家にとって、実に格好の、いわば願ってもない作品であったと思われるのである。

問題は『老ふくろう党员』と『赤いハンカチ』との関係である。前者の題名になっている老ふくろう党员が『赤いハンカチ』のケルヌヴェ侯爵であったこと、あるいは、あることは、『赤いハンカチ』の『九十三年』的

な筋立てからして間違いないであろう。さらに、ボトレルの戯曲として今に残されているレパートリーのなかに、『短刀』をはじめとして「青少年クラブもの」が相当数あることは、ボトレルの『回想』との照合によって確認されるにもかかわらず、そこには『老ふくろう党员』はなく、『赤いハンカチ』のほうだけが記載されているのである。したがって、おそらく『老ふくろう党员』は『赤いハンカチ』に変貌した、というよりも、とってかわられたのである。ただし、サン・トーギュスタン同窓会で上演されたのが前者、つまり旧作のほうであったことは確かであろう。『赤いハンカチ』では、イヴォンヌという女性役を登場させないわけにはゆかないからである。

要するに、『赤いハンカチ』は、ユゴーの『九十三年』的な筋立てに、ボトレルのヒット曲『ショレの赤いハンカチ』に見られる、「胸の内ポケットにおさめた白いハンカチが、敵の銃弾に当たった主人公の鮮血に染まって、見事なショレの赤いハンカチ化する」という筋立てを、いわばより合わせたものであるといえよう。一体、この『ショレの赤いハンカチ』的筋立ては、いつ、だれによって付け加えられたのだろうか。当然『ショレの赤いハンカチ』が発表されたあとであろう。その逆であったとはちょっと考えにくいからである。それもおそらく戯曲『赤いハンカチ』の補完者であるピエール・ダンジューの手によって、と筆者には思われるのであるが、それに著者、あるいは原著者とされているボトレルがどこまで関与しているのかは、厳密に言えば謎というよりほかない。しかし、刊行されたのがボトレルの死後20年もたってからであることを考えれば、ボトレルはまったく関与していないとみなすのが妥当であろう。

試みに戯曲『赤いハンカチ』から歌の『ショレの赤いハンカチ』的筋立てを除いてみよう。すると、老侯爵とアンリとジョルジュという男だけが

主要人物の、いや、端役の敵味方の兵士たちも含めて、登場人物はすべて男性というドラマが浮かんでこないだろうか。すなわち、幼なじみのいとこアンリを殺してしまったジョルジュが、さらにその父である老侯爵まで射殺せよという共和政府軍の命令を受けて、いよいよ政治的信条と血縁愛との板挟みになり、ちょうど『九十三年』の主人公が大伯父の身代わりになったように、伯父老侯爵の身代わりになって、味方の銃弾に身をさらし、「フランス万歳」と叫んで倒れるという筋書きである。ボトレル少年が、女性役を舞台に登場させてはならないという制約のなかで、『九十三年』を読みながら作った戯曲『老ふくろう党员』について、筆者はそんな内容を推察するのである。

『赤いハンカチ』の補完・刊行者であるピエール・ダンジューについて、筆者が承知しているのは、彼が特に1940年代に活躍したシャンソン蒐集家で、多くのシャンソン集を編んでいるばかりでなく、シャンソンの歴史も著していること、また彼は劇作家でもあって、主として一幕ないし二幕の戯曲を少なからず残していること、そして、シャンソン集であれ戯曲であれ、一貫してうかがわれるのはアンジュー、ブルターニュ、ヴァンデを中心とした地方の民間伝承への関心であって、実際アンジューとバスクの民話集も刊行しているといったことである。

ダンジューもボトレルと同じようにブルトンだったのであろうか。彼の名がアンジュー地方とのゆかりを思わせるだけに、あるいはそうであったのかも知れない。ともあれ、1946年という『赤いハンカチ』の刊行年と、主人公があくまで三色旗にこだわるその幕切れは、当時のブルターニュの人々の置かれた政治社会的な状況を考えるとき、格別な意味をもつと思われる。すなわち、もっぱら原聖氏の報告を借りると、第二次大戦中、ブルターニュ民族運動のなかで、反フランス民族主義という一致点からナチ

ス・ドイツにあゆみよった一派が、短期間とはいえ、「ブルターニュ民族会議」を組織して政治の表舞台に出たために、ブルターニュ民族派即対独協力派というイメージが生まれ、戦後には民族派だけでなくブルトン語擁護運動家までが対独協力の疑いをかけられて、投獄されるという事態を招いたのであって、この戯曲が刊行された1946年は、まさにフランス中が反ブルトン運動一色の時期だったのである⁽²⁶⁾。この戯曲を刊行時のそうした時代背景に重ね合わせて、ブルトンの主人公があくまで三色旗にこだわり、即製の旗を振り、「フランス万歳」と叫びながら三色の布地のなかに崩折れる幕切れに、ブルトンとフランスとの一体化の訴えが、いや、もっと正確に言えば、きわめて切実な、ブルトンの側からのフランスとの和解のメッセージがこめられていると見ることは、決して恣意的でも、うがちすぎでもないであろう。ピエール・ダンジューが、ユゴーの人道主義的小説に想を得た無名時代のボトレルの戯曲に、同じボトレルのヒット曲である『シヨレの赤いハンカチ』的筋立てをよりあわせて、『赤いハンカチ』を執筆し刊行したこと自体が、おそらくブルターニュをめぐるそんな政治社会状況と無縁ではなかったに相違ないと、筆者には思われるのである。

結びに代えて

本論稿は、1994年3月に刊行された「ヨーロッパ文化研究」第13集のために書き始められたが、浜川祥枝教授の定年によるご退任を記念する同論集に、前年6月に逝去された山田壽先生への追悼の思いもまたこめられていることは、成瀬治教授の「後記」に述べられている通りである。筆者が1988年春から一年間、海外研修制度を利用してフランスで過ごすことができたのは、まさに山田先生の温情のおかげであった。その先生に、研修期間中にシヨレを訪ねて、シヨレ市観光協会の広報誌中に、まったく思

いがけなく、『ショレの赤いハンカチ』の歌詞と由来書を見つけたときの、そして再びすでに日暮れた街中に出掛けて、店のウィンドーごしにあの鮮やかな赤地に白縞のハンカチを目にしたときの感動を、それはおそらく旅先ならではのものであったに違いないが、それを先生にお伝えできればという思いが、本論稿の執筆につながった次第である。

それにしても、執筆に着手したとき、これほどの分量になるとは予測していなかった。結局、1号置いて第15集に後半を発表する仕儀に至ったが、なお「アンリとショレの赤いハンカチないしはスカーフ」のテーマが生んだというよりも、それなしでは生まれなかった傑作として、Michel Ragon: *Les Mouchoirs rouges de Cholet*, Albin Michel, 1983 のあることに触れておく必要があるだろう。ふくろう党の反乱を題材にしたユゴー、バルザック、バルベール・ドルヴィエーの作品に比べて、ヴァンデの戦いを描いた純粹なフィクションものに傑作が見られないことは、ヴァンデ研究で知られる歴史家ジャン＝クレマン・マルタンの指摘する通りであるが、その彼もラゴンのこの作品については、「まさに規則を確証する例外」として高く評価している⁽²⁷⁾。実際筆者も、その民族誌的な描写の価値も含めて、この作品を評価する点ではあるいはマルタン以上ではないかとも思っている。とはいえ、「正史の空隙のなかで想像された黙示録的ヴィジョン」の所産であるこの歴史小説は⁽²⁸⁾、本論稿の狭義の主題である「ショレの赤いハンカチ」の由来とはほとんど無縁なばかりでなく、また一挿話的事実の物語化といった視点から扱うるものでも、扱うべきものでもないであろう。

拙論のために、特に三人の方のお世話になった。まず第一は、レンヌ大学付置日仏経営大学院において日本語を教授しているプリエ・橋爪女史で、同女史が歴史学者であるご主人の協力よろしきを得て、いずれもレンヌ市

立図書館所蔵のテオドール・ボトレルの『“白百合”歌集—1793年』初版本と、同じく戯曲『赤いハンカチ』のそれぞれコピーを届けて下さらなかったら、本論稿は成り立たなかったであろう。次にレンヌ市文化財保存担当官のロワール＝モンガゾン女史で、ショレのハンカチの歴史に関する筆者の問い合わせに、直ちに懇切丁寧な返事をたまわると同時に、地元でしか入手できない資料までお送りいただいた⁽²⁹⁾。最後に同学の沖縄国際大学教授大下祥枝女史で、パリ第十二大学に提出する博士論文を準備中の貴重な時間を割いて、アルスナルの資料室で、ピエール・ダンジューについてお調べ下さった。ここにお三方の名前を記して、心からの感謝の意を表する次第である。

ボトレルの『ショレの赤いハンカチ』の楽譜を大学院の教室に持参したときに、ある学生が、まったく楽譜の読めない筆者のために即座にハミングしてくれたのを思い出す。またある聴講生は、わざわざ二期会の人に頼んで、ピアノ伴奏付きで歌ってもらい、カセットに録音する労を取ってくれた。彼女たちにも感謝しなければならない。二人とも山田壽先生のご薫陶を受けた、今は立派な主婦兼職業人たちである。

山田先生のご逝去からもう2年半近い時が過ぎようとしているが、いまだにそのことを整理しきれないまま、長いご不在と思ひなして、日々を順送りしているようにも思う。山田先生や、あゝ先生や先生や。

〈付記〉 本論考が1994年度および1995年度の成城大学特別研究助成費制度による研究成果の一部であること、また〔注〕のあとに掲載する戯曲『赤いハンカチ』の本文が、先にも述べたように、ショレ市立図書館所蔵本のコピーによっていることを特に記しておく。

(1995年11月10日)

[注]

- (1) この2回目のフォントネーの会戦の日付については、比較的最近の大革命史やヴァンデ戦史だけでなく、1806年刊行の Alphonse Beauchamp: *Histoire de La Guerre de la Vendée et des Chouans* や、1824年刊行の J.-J.-Michel Savary: *Guerre des Vendéens et des Chouans contre la République*, t. I も1793年5月25日としている。ラ・トゥーシュがどんな根拠によったのか不思議に思われるが、問題は伝記という形式ゆえに、そこからまた歴史が、少なくとも新しい歴史的な日付が生まれることであろう。ラ・トゥーシュをアンリのもっとも博学な伝記作者と評価するキャップは、大革命200周年前にヴァンデ現象をあおる一因となった三部作の歴史小説で、この5月23日説を採用している。J.-François Chiappe: *La Vendée en armes I 1793*, Académique Perrin, 1982, p. 194.
- (2) Baron de La Tousche d'Avrigny: *Monsieur Henri Henri de La Rochejaquelein 1772-1794*, Emile-Paule, 1948, pp. 92-94.
- (3) 伝記作者の定義については Philippe Lejeune: *Le pacte autobiographique*, Éd. du Seuil, 1975, p. 198 を参照。
- (4) レオン・マレによる創作の実態と、大革命前のショレのハンカチの色に関する筆者の質問に対して、1995年9月18日付けで、Elisabeth Loir-Mongazon 女史から懇切な返事をいただいた。彼女の肩書はショレ市文化局の Attachée de Conservation で、もっぱら同市の Musée du Textile 関係の仕事に当たっているようである。なお、伝記であれ歴史小説であれ、フォントネーの戦場のアンリに赤地に白筋のショレのハンカチを着けさせているのは、筆者の知る限り、ラ・トゥーシュのほかには、彼にならったキャップだけである。Chiappe: *op. cit.*, p. 195.
- (5) バルザックは、ヴァンデ・ふくろう党ものの傑作でもある『ベアトリックス』のなかで、ブルターニュのなかでももっとも中世の面影をとどめたゲランドにあるゲーニックの館を描きながら、館のクローバー装飾が三つ葉ではなく四つ葉であることに関連して、キリスト教徒の建築家たちが三位一体に忠実であったのに対して、東方貿易でなかばモール人化したヴェネチア派の建築家たちは、カトリックのこの偉大な思想など気にならなくなり、クローバーに四つ葉を与えたのだと述べている。美的選択とカトリックの玄義とのつながりを示す印象的な記述であろう。Balzac: *Béatrix*, *La Comédie humaine*, t. II, p.

- 649, nouvelle éd. de la Pléiade.
- (6) Mémoires de la marquise de La Rochejaquelein, née Marie-Louise-Victoire de Donissan, Édition présentée et annotée par André Sarazin, Collection Le Temps retrouvé XXXX, Mercure de France, 1988, p. 157.
- (7) Genoude: Voyage dans la Vendée, 1821, p. 95. Françoise de Chabot: Henri de La Rochejaquelein et la Guerre de la Vendée, Réédition de 1890, Yves Salmon, 1980, p. 29 を参照。
- (8) この史実については、白水社発行「ふらんす」1990年1月号に掲載の拙稿『ガレルヌの彷徨を追って(1)』に、いささか詳述してある。
- (9) Mémoires de Madame la marquise de Bonchamps sur la Vendée, rédigés par Madame la comtesse de Genlis, Réédition de 1823, Yves Salmon, 1981, p. 67 を特に参照。
- (10) Baron de La Tousche d'Avrigny: op. cit., p. 194 を特に参照。
- (11) J. Créteineau-Joly: Histoire de la Vendée militaire, La librairie Française, 1979, t. I, p. 128. なお、本書の初版は1840-1841年に刊行された。
- (12) F. Chabot: op. cit., p. 52.
- (13) Mémoires de la marquise de La Rochejaquelein, éd. cit., p. 157.
- (14) Théodore Muret: Vie populaire de La Rochejaquelein. Paris, Dentu, 1845, p. 16. F. Chabot: op. cit., p. 56 参照。
- (15) “Les Coquelicots” 自体は、もっぱら豪胆若大将アンリを称えた軍歌的叙事歌謡ともいえるもので、およそ万人に愛唱されるようなものではない。
- (16) Mémoires de la marquise de La Rochejaquelein, éd. cit., p. 361, note (1)
- (17) Bibliographie de la Contre-Révolution dans les Provinces de l'Ouest ou des Guerres de la Vendée & de la Chouannerie par Yves Vachon, Librairie Nantaise Yves Vachon, 1980.
- (18) ボトレルは作曲家のポール・デルメ Paul Delmet に自作の歌詞を送ったのが縁で、デルメたちがサリーを嫌ってサン・トロレ街に開いたばかりの芸術酒場《黒犬》Chien-Noir で、歌手としてデビューすることになったのであった。Théodore Botrel: Les Souvenirs d'un barde errant, Préface de Charles Le Goffic, Réédition de 1926, Yves Salmon, 1988, p. 146 を特に参照。
- (19) Ibid., pp. 102-103 を参照。
- (20) Ibid., pp. 108-109 を参照。

- (21) Ibid., pp. 105-106 を参照。
- (22) Ibid., p. 110 を参照。
- (23) Ibid., pp. 110-111 を参照。
- (24) V. Hugo: Quatrevingt-Treize, éd, Garnier 1963, Introduction par Jean Boudout, p. XXIX を特に参照。
- (25) 「ボンシャンの赦し」事件は1793年10月18日のことで、『九十三年』の後半が展開するのは、同年の夏である。このアナクロニズムは、ユゴーが『九十三年』の大詰めに至る筋立てにおいて、「ボンシャンの赦し」事件をどれほど必須と見ていたか、というよりも、『九十三年』の着想自体に、この事件がいかに決定的に与かっているかを示していよう。
- (26) 原聖『周縁的文化の変貌——ブルトン語の存続とフランス近代——』三元社、1990年刊の243頁と247頁を特に参照。
- 27) J.-Clément Martin: Littérature populaire et guerre de Vendée, Histoire et littérature de fiction, Colloque “Vendée, Chouannerie, Littérature” Presses de l'Université d'Angers, 1986, p. 36.
- (28) Ibid., p. 42 を参照。
- (29) お送りいただいた資料のうち、ショレ市織物博物館友の会機関紙 Bulletin de liaison et d'information des Amis du Musée du Textile Choletais である《De Fil en Aiguille》の、1993年12月刊行の第13号に掲載された論文 Jean Maillard: Théodore Botrel à Cholet en 1990 ou l'apologie de l'insurrection は特に貴重であった。同論文は、筆者西とほぼ同じ根拠で、ボトレルが『ショレの赤いハンカチ』を初めて歌ったのが、1990年4月末にショレ市立劇場で開催された、オルフェオン合唱団の年次コンサートであったという説を否定するとともに、そのコンサートで、ボトレルが『ひなげし』に付け加える形で、ボーア戦争で倒れたヴィルボワ・マルイユ Villebois-Mareuil をたたえる詩節を朗唱したことが発端となって生じた政治的トラブルについて、そのいきさつをかなり詳細に報告している。

Théodore BOTREL

258.024
15

Le mouchoir rouge



LE LISERON
25, rue de l'Echaudé
PARIS

THEODORE BOTREL
RENNES
MUSICAL

THÉODORE BOTREL

LE MOUCHOIR ROUGE

Episode de la Chouannerie (1793)

en un acte

reconstitué et complété

par PIERRE D'ANJOU



**PARIS
LE LISERON
25, rue de l'Echaudé**

TOUS DROITS RÉSERVÉS

PERSONNAGES :

LE MARQUIS DE KERNEVEZ (60 ans).

YVONNE, sa fille (20 ans).

ALAIN, son fils, chef royaliste (25 ans).

GEORGES VILLENEUVE⁽¹⁾, capitaine républicain, son neveu (25 ans).

Le lieutenant « chouan ».

Le sergent « bleu ».

« Chouans » et « bleus ».

La scène se passe en Bretagne, dans la grande salle du château de Kernevez, en 1793.

(1) Traduction française du nom breton de Kernevez.

LE MOUCHOIR ROUGE

DRAME EN UN ACTE

PREMIER TABLEAU

Une grande salle au château de Kernevez. Aux murs, des portraits de famille. A gauche de la grande porte d'entrée, portrait de Louis XVI dont la base est à demi drapée dans un grand drapeau blanc ; à droite, le portrait d'Alain de Kernevez entre la porte et une large fenêtre aux vieux vitraux grillagés. Un petit carreau seul peut facilement s'ouvrir pour surveiller à l'extérieur. Tout est barricadé solidement. On entend au loin le bruit d'un combat qui, peu à peu, se ralentit pour s'éteindre bientôt tout à fait.

Une table au milieu, un peu à droite ; un grand fauteuil au premier plan, un peu à gauche. Chaises, meubles anciens garnis de bibelots.

SCENE PREMIERE

LE MARQUIS DE KERNEVEZ, YVONNE

Au lever du rideau, le Marquis, assis à la table, lit quelques lettres aux dernières lueurs du jour agonisant. Il tressaille à chaque coup de feu. Yvonne, assise près de la fenêtre, brode.

LE MARQUIS (*interrompant sa lecture*). — Les braves gens !
Ecoute comme ils se battent bien ! Mais comment en serait-il autre-

ment lorsqu'il s'agit de défendre son sol, ses libertés, sa religion et son roi ! Et dire qu'ils n'ont à opposer aux canons et aux fusils de leurs ennemis que des fourches et des faux emmanchées à rebours !

YVONNE (*sans interrompre son ouvrage*). — Et leur poitrine, père.

LE MARQUIS. — Tu as raison ! Leur poitrine où bat leur cœur ardent et généreux ! (*Un silence. Le Marquis prend une lettre, l'ouvre et se frotte les yeux.*) Mes yeux faiblissent, veux-tu me lire cette lettre, mon enfant ?

(*Yvonne se lève, pose son ouvrage et prend la lettre que lui tend son père.*)

YVONNE (*lisant*). — « J'ai la douleur de vous apprendre la mort de votre frère, mon regretté père. Quoique séparé de lui depuis longtemps par vos opinions politiques, je sais que vous le pleurerez. Je serai bientôt du côté de Kernevez ; me sera-t-il permis d'aller vous présenter mes respects ? Veuillez dire mes amitiés à mon cousin Alain, mes souvenirs d'enfance à ma cousine Yvonne que j'aurai grande joie à retrouver.

Votre très respectueux neveu,

GEORGES. »

YVONNE (*s'essuyant les yeux*). — Pauvre oncle !

LE MARQUIS (*irrité*). — Donne cette lettre !

LE MARQUIS (*déchirant la lettre*). — On ne pleure pas un négat ! Et le jour où cet homme a renié la foi de ses ancêtres et trahi son roi, il a cessé d'être mon frère !

YVONNE (*émue*). — Mon père ! Il faut pardonner aux morts !

(*Un silence.*) Et Georges, le recevrez-vous ?

LE MARQUIS. — Non ! S'il vient ici, il ne peut le faire qu'avec les armées de la République. Ayant pactisé avec nos ennemis, il s'est délibérément assimilé à eux. Ce n'est pas moi qui le rejette, ma fille, mais lui-même qui, volontairement, s'est séparé de nous. N'a-t-il pas été jusqu'à troquer son nom de Kernevez pour s'affubler de la traduction française de Villeneuve ? Que pouvait-il reprocher à ce vieux nom breton ? Nos aïeux ne l'ont-ils pas assez couvert de gloire ? (*Se levant.*) Un Kernevez combattait aux côtés de Du Guesclin, un autre suivit le roi François et fut, comme son maître, fait prisonnier à Pavie. On vit un Kernevez dans les armées d'Henri IV et un autre se fit tuer à Salzbach près de Turenne. (*Il montre un portrait.*) C'est lui ! (*Montrant un autre portrait.*) Et voici mon propre grand-père : Arnaud de Kernevez, qui eut l'honneur de commander à Fontenoy ! Aujourd'hui, Alain, ton frère (*leurs yeux se portent sur le portrait du dernier des Kernevez*) se bat à la tête d'une troupe chouanne, comme je le ferais moi-même si ma main pouvait encore tirer l'épée. Alors que Georges, lui...

YVONNE (*l'interrompant*). — Père ! N'accablez pas mon cousin !

LE MARQUIS (*surpris*). — Je ne comprends pas, ma fille ! Excuserais-tu ce monstre ?

YVONNE. — Non ! Je sais, car j'ai gardé comme vous l'honneur du nom, qu'en prenant le parti des républicains, Georges a failli à son devoir, mais...

LE MARQUIS. — Alors, que veux-tu dire ? Parle !

YVONNE (*troublée*). — Georges va revenir. Il tentera de pénétrer ici pour me voir.

LE MARQUIS (*interloqué*). — Pour te voir ?

YVONNE (*calme*). — Oui, père, pour me voir. En d'autres temps, sans doute, j'aurais eu grande joie à vous révéler mon secret. Je le gardais, espérant qu'un jour il me serait permis de tout vous avouer, parce que la concorde serait revenue ; mais, depuis cette lettre, je suis comme oppressée !

LE MARQUIS (*avec force*). — Quel est ce secret ? Je veux savoir !

YVONNE (*résolue*). — Vous le connaîtrez ! Mais, auparavant, laissez-moi vous rappeler quelques circonstances qui vous aideront à me comprendre. Georges, vous le savez, fut l'ami d'enfance de mon frère Alain. Toute petite, et bien qu'un peu plus jeune, je partageais leurs jeux puisque mon cousin nous faisait de fréquentes visites à Kernevez. Je le considérai longtemps comme un charmant camarade toujours empressé, toujours attentif. Et puis, un jour — c'était à l'été de 1789 — voici donc quatre ans, nous fîmes tous deux une promenade à cheval. Partis pour les bois de Quémeran, nos montures nous entraînèrent jusqu'aux marais de Lanilec...

LE MARQUIS (*nerveux*). — Continue !

YVONNE (*poursuivant*). — ...là, Georges me parla des événements politiques qui se déroulaient dans la capitale...

LE MARQUIS. — L'assaut contre la Bastille ?

YVONNE. — Oui ! Et il me fit pressentir qu'un jour, peut-être, il devrait s'éloigner de nous... (*un temps*) de moi...

LE MARQUIS. — J'ai peur de comprendre !

YVONNE (*très émue*). — Et, ce soir-là, Georges me fit l'aveu de son amour !

LE MARQUIS (*accablé*). — Il a osé ? Le malheureux !

YVONNE (*vivement*). — Mais, père, il s'appelait encore Kernevez !

LE MARQUIS (*plus calme*). — C'est vrai ! (*Un temps.*) Et toi ?...

YVONNE (*qui ne s'attendait pas à la question*). — Moi ?

LE MARQUIS. — Oui, toi ! Qu'as-tu répondu quand il t'a dit qu'il t'aimait ?

YVONNE (*doucement*). — Je n'ai pas su mentir, père ! Les paroles qui sont venues à mes lèvres lui ont fait comprendre le doux sentiment que j'avais pour lui.

LE MARQUIS (*fait les cent pas, puis s'arrête brusquement*). — Jamais je ne permettrai cela ! Et puis, pourquoi ne pas m'avoir parlé plus tôt ?

YVONNE. — Je ne sais ce qui me fit hésiter le soir même, ou plutôt si : la présence de Georges. Puis les événements se précipitèrent. La Révolution monta. Georges de Kernevez devint Georges Villeneuve et soldat de la République. Alors, je me tus définitivement, car pouvais-je vous avouer que j'aimais un « bleu » ?

LE MARQUIS (*irrité*). — Un « bleu » !

YVONNE (*très calme*). — Il a fallu cette circonstance... cette lettre... pour qu'enfin j'ose vous faire cet aveu.

LE MARQUIS (*s'est avancé jusqu'à la fenêtre, son regard plonge dans la campagne. Il se retourne et demande :*) — Et maintenant ?

YVONNE (*surprise*). — Que voulez-vous dire ?

LE MARQUIS (*se décidant*). — L'aimes-tu encore ?

YVONNE (*accablée*). — Père ! Père ! Je vous en supplie, ne me demandez pas cela !

LE MARQUIS (*exaspéré*). — Ainsi, tu l'aimes ? Oui ! je le sens, tu n'as pas cessé d'aimer cet être malgré ses trahisons, ses reniements !

YVONNE (*se jetant au cou de son père*). — Père ! Père !

(*Au loin, le cri de la chouette*).

LE MARQUIS (*se dégage de l'étreinte*). — Le cri des chouans !...
Ce sont nos hommes !... Va ouvrir !

(*Yvonne essuie ses yeux humides de larmes et, tandis que le cri de la chouette retentit de nouveau, se dirige vers la porte.*)

SCENE II

Les mêmes, des chouans et ALAIN de KERNEVEZ

Des chouans entrent brusquement, les vêtements déchirés, quelques-uns sont blessés. Alain de Kernevez, porté sur un brancard, est déposé au milieu de la pièce.

LE MARQUIS (*s'avançant vers le blessé*). — Tu es blessé ? Alain !
Mon petit !

YVONNE (*qui s'empresse également*). — D'où souffres-tu ?

(*Elle aide Alain à se soulever et, aidée du Marquis et de chouans, le porte sur le grand fauteuil à gauche, après avoir déposé le manteau et le chapeau de son frère sur la table.**)

ALAIN (*faiblement*). — Père... et toi Yvonne... écoutez-moi ! Je

n'ai plus que quelques instants à vivre... j'ai reçu là... un coup de pistolet... en pleine poitrine... (*il étouffe, ses mains s'agitent convulsivement*) mais je me suis bien battu!... Je vais mourir... je le sais... mais vous... père... toi, Yvonne... et vous, mes chouans... il faut vivre... vous m'entendez, pour... un jour, voir le roi revenir... et nos églises accueillir nos prêtres... les vrais...

(*Yvonne s'agenouille aux pieds de son frère, tandis que le Marquis et les chouans essuient leurs yeux.*) ...et toi... lorsque, plus tard... le vieux château de Kernevez s'emplira des rires... de tes enfants... songe que... moi aussi... j'aurais aimé vivre... vivre, et me pencher sur des berceaux... Du moins... ne m'oublie pas... dans tes prières... (*la voix devient plus haletante*) et... fais fleurir... ma tombe... par ces petites mains... pour que... je me sente... moins seul (*la parole entrecoupée de hoquets*)... Maintenant... allez me chercher... le drapeau blanc... je veux baiser... ses plis... une fois... encore... avant... de... mourir!

(*Le Marquis décroche le drapeau semé de fleurs de lys, l'apporte à son fils qui se soulève un peu pour embrasser le glorieux emblème.*)

...Adieu, père... adieu... Yvonne!... Adieu vous tous... mes compagnons... adieu... (*Il étreint le drapeau et s'écrie :*) Vive... le Roi! (*Il retombe mort.*)

(*Les chouans se découvrent. Yvonne éclate en sanglots tandis que le Marquis se raidit devant la douleur.*)

LE MARQUIS (*se tournant vers les chouans*). — Vive le Roi! Messieurs.

(Tous s'agenouillent.)

YVONNE *(commence à réciter le De Profundis)*. — De profundis clamavi ad te, Domine. Domine, exaudi vocem meam.

(Le Marquis dépose le drapeau sur le cadavre de son fils, tandis que les assistants font les répons.)

LES CHOUANS. — Fiant aures tuae intendentis, in vocem deprecationis meae.

(En fond sonore pluie et vent.)

YVONNE. — Si iniquitates observa...

(Un coup brutal est frappé à la porte.)

LE MARQUIS *(vivement)*. — N'ouvrez pas !

(On frappe à nouveau.)

LE MARQUIS. — Emportez le cadavre à la chapelle du château !

(Quelques chouans s'emparent du brancard, y déposent le corps d'Alain. Le cortège funèbre sort par la droite. Yvonne drapé le portrait d'Alain suspendu au mur avec le drapeau blanc. Durant ce temps, le chef chouan ouvre un des petits vitraux de la fenêtre et regarde au dehors. Les coups frappés à la porte redoublent d'intensité et de violence.)

SCENE III

Les mêmes, moins ALAIN et quelques chouans

LE MARQUIS *(au chef chouan)*. — Qui est-ce ?

LE CHEF. — Je ne sais pas !

(Yvonne à son tour regarde et recule presque immédiatement.)

YVONNE (*troublée*). — Père ! Je crois reconnaître Georges !

LE MARQUIS. — N'ouvrez pas !

(La pluie et le vent redoublent de violence. A la porte, les coups sont frappés nerveusement.)

YVONNE. — Père ! Je vous en supplie ! Par un temps pareil !

LE MARQUIS. — Que m'importe !

YVONNE (*suppliante*). — Vous ne pouvez le condamner sans l'avoir entendu !

LE MARQUIS. — A quoi bon ! Je sais qu'il s'est parjuré, cela me suffit !

YVONNE. — Père ! Père ! Peut-être vient-il vous apporter les dernières pensées de notre oncle, de votre frère ! et peut-être aussi... qui sait... confesser son erreur !

LE MARQUIS (*ébranlé*). — Soit !

(De nouveaux coups sont frappés.)

LE MARQUIS. — Qui est là ?

(Une voix indistincte répond, mais le Marquis reconnaît cette voix et fait signe que c'est bien celui que l'on présumait.)

LE MARQUIS. — Ouvrez !

SCENE IV

Les mêmes, plus GEORGES VILLENEUVE

(Georges Villeneuve entre. Il est enveloppé d'un grand manteau. Dans sa main droite il tient son chapeau à panache tricolore. La nuit est presque tombée. Georges s'incline devant son oncle et sa cousine

Yvonne.)

LE MARQUIS (*aux chouans*). — Laissez-nous seuls !

(*Les chouans se retirent, mais, en se retirant, l'un d'eux fixe Georges avec insistance, comme si le visage de l'officier ne lui était pas inconnu. Un moment il esquisse le geste de revenir sur ses pas comme pour faire part au Marquis de ses réflexions. Subitement, il se décide à sortir.*)

SCENE V

LE MARQUIS DE KERNEVEZ, YVONNE, GEORGES VILLENEUVE

(*Le Marquis va lui-même allumer deux candélabres de la cheminée et les apporte sur la table. C'est alors que Georges tend la main à son oncle qui refuse la sienne, mais désigne un siège à son neveu. Georges ne s'assied pas, mais se tourne vers Yvonne.*)

GEORGES (*à Yvonne*). — Comme vous voilà grande et belle !

(*Il lui prend la main et va la lui baiser quand le Marquis les sépare brusquement.*)

GEORGES (*douloureusement surpris*). — Mon oncle ! Nous nous sommes connus si petits !

YVONNE (*à son père*). — Dieu vous commande d'être bon et de pardonner les injures ! Un chrétien ne doit-il pas montrer l'exemple en arrachant de son cœur toute haine !

GEORGES (*très calme*). — Je suis seul au monde ! Cette guerre est odieuse, mais bientôt la paix reviendra et réconciliera tous les Français !

YVONNE (*à son père*). — Georges est venu vers vous confiant et

sincère !

LE MARQUIS (*à sa fille*). — Ta bonté, mon enfant, a raison de mes rancunes. (*A Georges.*) Que veux-tu ?

GEORGES. — D'abord vous prier de me bénir !

LE MARQUIS (*ironique*). — Te bénir ? Est-ce qu'un bleu, qui ne croit ni à Dieu ni à diable, a besoin d'être béni ?

(*Yvonne sanglote ; le manteau de Georges s'entr'ouvre, découvrant son uniforme républicain.*)

LE MARQUIS (*très irrité à cette vue*). — Quoi ! Chez moi, un tel uniforme !

GEORGES (*domptant sa colère*). — N'insultez pas mon uniforme ! Il n'est pas celui d'un parti ou d'une coterie, mais celui des fils de France, et vous devez le respecter comme il est du devoir de tous de vénérer ceux qu'ont porté nos pères... que porteront nos fils. Je suis un soldat, rien qu'un soldat ! Je puis haïr la guerre, la trouver criminelle, surtout quand elle met des frères en présence ; aussi j'ai sollicité la faveur de partir à la frontière. On vient de m'accorder cette grâce ; demain je partirai, voici mon ordre !

(*Il déplie un papier et le tend au Marquis qui le repousse. Alors Georges lit :*)

« Au nom de la République Une et Indivisible :

« Le lieutenant Georges Villeneuve, ci-devant Kernevez, est
 « nommé capitaine aux Armées de l'Est. Il devra se diriger au
 « plus tôt sur la frontière pour se mettre à la disposition du
 « général Jourdan.

« Salut et Fraternité.

« Dixième jour de Frimaire, An II.

« Le Ministre de la Guerre :

« *Signé* : BOUCHOTTE. »

LE MARQUIS (*nullement impressionné*). — C'est tout ce que tu voulais de moi ?

GEORGES (*placide*). — Oui, puisque vous me refusez la grâce que j'étais venu solliciter de vous. (*Tourné vers Yvonne et changeant de ton.*) A vous, ma cousine, j'étais venu vous demander de me garder votre cœur, votre amour jusqu'au jour où je reviendrai vainqueur des ennemis de la Nation.

LE MARQUIS (*au comble de l'indignation*). — Quoi ! Tu oserais encore prétendre...

(*Coup brusque frappé à la porte du fond.*)

LE MARQUIS. — Qu'y a-t-il ?

LE CHEF CHOUAN (*entr'ouvrant la porte*). — Monsieur le Marquis, il faut que je vous parle sans retard !

LE MARQUIS. — Eh ! bien, entrez !

SCENE VI

Les mêmes, le chef chouan, deux chouans

(*Sans mot dire, tandis que les deux chouans se plantent devant les deux issues, le chef se dirige vers Georges. Arrivé à sa hauteur, il prend un flambeau et le met sous le nez de l'officier républicain.*)

LE CHEF (*à ses hommes*). — Eh ! bien.

(Les deux hommes fixent le visage violemment éclairé par le candélabre.)

PREMIER CHOUAN. — Pas de doute !

DEUXIÈME CHOUAN. — C'est bien lui !

LE MARQUIS (*surpris*). — Que voulez-vous dire ?

LE CHEF. — Voilà, Monsieur le Marquis. Nous étions en embuscade dans la lande de Languidec, cachés derrière des touffes d'ajoncs. Depuis près de trois heures nous attendions un détachement de « bleus » qui devait faire une incursion dans le village pour tenter d'y arrêter notre recteur, réfractaire, comme vous savez. Or, à la nuit tombante, le détachement parut. Aussitôt que nous vîmes les uniformes des « bleus », nos fusils partirent. Surpris, nos ennemis se montrèrent un moment décontenancés et prêts à fuir. C'est alors que l'officier qui commandait le détachement parvint à regrouper ses hommes et à les lancer sur nous. Monsieur Alain nous ordonna de foncer et, le premier, sortit de sa cachette. Nos faulx en avant, nous nous ruâmes sur les Patauds. Ce ne fut pas long ; en quelques instants, les « bleus » demandaient grâce ou détalait comme des lapins entre les touffes d'ajoncs, quand, brusquement, l'officier républicain leva son poing armé d'un pistolet, visa. Le coup de feu atteignit Monsieur Alain en pleine poitrine. Cet officier républicain, il est là, devant vous ! (*Désignant Georges.*) Cet homme, le voilà !

LE MARQUIS (*terrifié*). — Que dites-vous ?

YVONNE (*accablée*). — Ce n'est pas vrai, n'est-ce pas Georges ?

N'est-ce pas que vous n'avez pas tué mon frère Alain ?

LE CHOUAN (*ironique*). — Défends-toi, si tu l'oses !

LE MARQUIS (*que le mutisme de Georges exaspère*). — Eh ! bien, parle !

GEORGES (*calmement*). — Cet homme a dit vrai. C'est moi qui, d'un coup de pistolet, ai abattu le chouan qui commandait l'embuscade... mais, jusqu'à cet instant, j'ignorais qu'il s'agissait d'Alain !

YVONNE (*dans un grand cri de désespoir*). — Ah !

(*Elle s'affaisse en pleurant sur le fauteuil.*)

LES CHOUANS (*tirant leurs couteaux ou leurs pistolets*). — Il avoue ! A mort ! A mort !

LE MARQUIS (*arrêtant leur geste*). — Non ! Les personnes qui se sont réfugiées sous mon toit sont sacrées.

LE CHOUAN. — Permettez au moins que nous le désarmions !

LE MARQUIS. — Oui !

(*Le chef chouan arrache le pistolet et le montre au Marquis.*)

LE CHOUAN. — Voici l'arme fratricide !

(*Le Marquis essuie un pleur et prend l'arme qu'on lui tend.*)

LE MARQUIS (*dans un murmure*). — Alain !...

(*Le chef chouan veut alors s'emparer de l'épée, mais Georges, d'une bourrade, le repousse ; il tire lui-même son arme du fourreau, la baise, la prend par la pointe et la tend à son oncle en s'inclinant. Le Marquis prend l'épée, la dépose sur la table à côté du pistolet.*)

LE MARQUIS (*aux chouans*). — Sortez à présent !

(En grognant, les chouans sortent par la droite.)

SCENE VII

Les mêmes, moins les chouans et leur chef

(Yvonne, complètement effondrée, sanglote sur le fauteuil.)

GEORGES *(se précipitant vers son oncle)*. — Mon oncle! Soyez assuré que seule la fatalité...

LE MARQUIS *(impassible)*. — Je ne veux rien entendre! Pars! Et que nous n'entendions plus jamais parler de toi! Pour nous, Georges de Kernevez est mort!

GEORGES *(très ému)*. — Mon oncle, écoutez-moi...

LE MARQUIS *(l'interrompant)*. — Vos paroles ne serviraient de rien. Le reniement de votre foi, la trahison envers votre roi ne vous suffisaient pas! Il vous restait encore à devenir l'assassin de mon fils! C'est fait! Vivez, si vous le pouvez, mais vos mains resteront éternellement souillées du sang d'Alain, du sang qui tombait de la poitrine trouée de mon fils!

GEORGES *(bouleversé)*. — Je n'ai pas voulu cela!

LE MARQUIS. — Il est trop tard, vos regrets sont superflus! Il vous reste le remords, si toutefois vous êtes capable d'en avoir. Mais, brisons là... *(A sa fille.)* Viens, mon enfant! La dépouille d'Alain attend nos prières!

(Yvonne, secouée de sanglots, se lève péniblement. Georges se précipite aux genoux de la jeune fille.)

GEORGES *(suppliant)*. — Et vous, Yvonne, serez-vous sans pitié

pour le malheureux que je suis ?

YVONNE (*stoïque*). — Ne m'approchez pas !

GEORGES. — Votre cœur s'est-il fermé subitement et ne vous souvient-il plus des heures d'autrefois ? Yvonne, je vous en supplie, ne me repoussez pas, seul votre amour peut me rattacher encore à la terre ! Si vous me refusez votre pardon, que m'importe l'existence ? Laissez-moi espérer que, plus tard, quand le temps aura atténué votre douleur, vous vous souviendrez de moi, de notre amour !

YVONNE (*placée devant le portrait de son frère*). — Non ! Ce que vous me demandez là est impossible ! Désormais, entre nous il y a Alain ! Alain, dont j'ai vu la poitrine fracassée, la bouche muette et les yeux fixes ! Alain qui voulait aimer, lui aussi, qui désirait vivre ! Alain est entre nous, pour toujours... Adieu !

(*Elle se sauve en laissant tomber le mouchoir avec lequel elle essuyait ses larmes. Derrière elle, le Marquis referme la porte de droite.*)

SCENE IX

GEORGES, *seul*

GEORGES (*courant à la porte derrière laquelle Yvonne et son père viennent de disparaître*). — Yvonne ! Ecoutez-moi ! Vous ne pouvez pas ne pas m'entendre !

(*Il frappe à la porte, qui reste close.*)

Vous ne pouvez pas ne pas me pardonner, ne pas me permettre d'espérer !

(*Il écoute, mais rien ne lui répond et, désespéré, il revient au centre*

de la pièce.)

Me faut-il perdre à jamais celle qui était tout pour moi ? Que m'importe la vie à présent, si je ne dois plus la revoir !

(Son regard se pose sur le pistolet que le Marquis a abandonné sur la table. Il semble hésiter, puis, brusquement s'en empare. Lentement, il l'arme et va porter le canon à sa tempe. Soudain, il aperçoit le mouchoir tombé à terre ; il le ramasse, l'embrasse.)

Qui sait !... un jour, peut-être !

(Il remet le pistolet dans son étui, son épée dans son fourreau.)

Et puis, la Patrie a besoin de moi !

*(Il entr'ouvre son habit, glisse le mouchoir dans sa poche, sur son cœur. A ce moment la porte est ébranlée par des coups** de crosse.)*

GEORGES. — Qui va là ?

UNE VOIX. — Ouvrez ! Au nom de la Nation !

(La porte cède sous la violence des coups et s'ouvre brutalement. Un groupe de « bleus » conduit par un sergent envahit la salle du château et s'arrête médusé devant l'officier républicain qui, les bras croisés sur la poitrine, les regarde fièrement. Les soldats présentent les armes à Georges.)

SCENE X

GEORGES, le sergent « bleu », des soldats

GEORGES. — Qu'y a-t-il ? Que venez-vous faire ici ?

LE SERGENT. — Exécuter un ordre, capitaine !

GEORGES. — Quel ordre ?

LE SERGENT. — Celui-ci. (*Il tend à Georges un papier.*)

GEORGES (*lisant*). — « Un vieux chef royaliste, ennemi juré de
« la République Une et Indivisible, se cache au château de Kernevez.
« Ordre est donné de s'emparer du chouan et de le passer par les
« armes avant minuit.

« Salut et Fraternité.

« *Signé*: CANCLAUX. »

(*Il jette l'ordre sur la table, puis, après un court silence :*)

C'est bien! Je suis ici moi-même pour exécuter cet ordre!
Sortez! J'en fais mon affaire!

LE SERGENT (*qui sait sa responsabilité engagée*). — Excuse! ci-
toyen capitaine, mais c'est formel! Je dois fusiller moi-même le
vieux renard!

GEORGES. — Qui te dit le contraire? Mais, ici, vous risquez de
vous faire prendre comme dans une ratière! J'ai mes renseigne-
ments, des chouans sont cachés ici! Alors, embusquez-vous derrière
les arbres de la grande allée du château et attendez!

LE SERGENT (*encore soupçonneux*). — Il me faut un ordre écrit,
alors, pour cela!

GEORGES. — Soit!

(*Georges s'installe à la table, sort un papier, trempe la plume d'oie
dans l'encrier et, tout en écrivant, monologue :*)

« Des chouans étant assemblés en grand nombre au château de
« Kernevez, ordre est donné par moi au sergent Luzon de
« s'embusquer avec son détachement dans l'allée centrale du châ-

« teau et de faire feu sur le chouan que, sous un prétexte quelcon-
« que, je ferai sortir du château. On le reconnaîtra facilement à la co-
« cardes blanche et au panache blanc de son chapeau. Après
« l'exécution sommaire, retraite rapide pour éviter un retour offensif
« des chouans. Le cadavre sera laissé sur place en exemple de la jus-
« tice.

« Salut et Fraternité.

« Capitaine VILLENEUVE. »

Voici ! (*Il tend l'ordre au sergent.*)

LE SERGENT (*après avoir jeté un rapide coup d'œil sur le billet.*) —
Suffit ! Parfait. (*A ses hommes.*) Allez, vous autres, suivez-moi !

GEORGES. — Chut !... pas de bruit !

LE SERGENT (*avec un gros rire.*) — Soyez tranquille... on est pas
des Patauds, quoi qu'on dise !

(*Ils s'éloignent en silence et disparaissent.*)

GEORGES (*rappelant le sergent qui sort le dernier.*) — Et visez
bien surtout !

LE SERGENT. — Ne craignez rien, nous ne le manquerons pas !
(*Il sort.*)

SCENE XI

GEORGES, seul

(*Georges reste un moment immobile à la table, puis, quand les bruits
ont cessé, il se lève, décroche le manteau d'Alain et le chapeau à pa-
nache blanc du chef chouan. Il se dépouille de son manteau, tire de sa*

poche le mouchoir laissé par Yvonne, l'embrasse et le remet sur son cœur ; après quoi, il se saisit du manteau de son cousin, le jette sur ses épaules et coiffe le chapeau du mort. Il envoie un baiser douloureux vers la porte où Yvonne a disparu, puis, lentement, marche vers la porte extérieure. Sa main s'arrête sur la poignée, il se retire alors, regarde le portrait de son cousin, le salue et murmure :) — Toi, du moins, pardonne-moi *(et, brusquement, il ouvre la porte.)*

(Toute cette scène doit être jouée lentement.)

SCENE XIII

LE MARQUIS, YVONNE, le chef des chouans

(La scène est vide, les flambeaux éclairent la pièce silencieuse. Tout à coup, une vive fusillade éclate, toute proche. Quelques instants plus tard, le Marquis apparaît par la porte de droite, suivi de sa fille et des chouans.)

YVONNE *(affolée)*. — Qu'y a-t-il, père ! Une attaque ?

LE MARQUIS *(un peu nerveux)*. — Je ne sais !

LE CHEF CHOUAN *(à ses hommes)*. — Allons, les gâs, êtes-vous prêts ?

LES CHOUANS *(ensemble)*. — Oui ! *(Ils brandissent leurs fusils ou leurs faulx.)*

LE CHEF CHOUAN. — Suivez-moi !

(Ils s'apprêtent à sortir. Le Marquis aperçoit un papier sur la table.)

LE MARQUIS. — Attendez !

(Il s'empare de l'ordre et l'approche du flambeau.)

LE MARQUIS. — Décidément, mes yeux baissent! (*A sa fille.*)
Lis, veux-tu ?

YVONNE (*prend le papier et lit*). — « Un chef royaliste, ennemi
« juré de la République Une et Indivisible, se cache au château de Ker-
« nevez. Ordre est donné de s'emparer du vieux renard et de le
« passer par les armes avant minuit.

« Salut et Fraternité.

« *Signé*: CANCLAUX. »

LE CHEF CHOUAN. — Mais c'est vous, Monsieur le Marquis, qui
êtes désigné par cet ordre ?

LE MARQUIS (*très calme*). — Il est impossible d'en douter !

YVONNE (*qui ne comprend pas*). — Mais alors, ces coups de feu ?

LE MARQUIS (*interloqué*). — Evidemment! (*Ironique.*) Ils
n'auraient pas eu l'imbécillité de me prévenir par une fusillade !

YVONNE. — Ni de vous laisser cet ordre.

LE CHEF CHOUAN. — Mais, l'officier républicain de tout à l'heure
n'est peut-être pas étranger dans tout cela ?

YVONNE (*se récriant*). — Georges ? Le croyez-vous capable
d'une telle vilénie ?

LE CHEF CHOUAN. — Qui sait ! Après avoir assassiné le fils, il
avait peut-être mission de fusiller le père ?

YVONNE (*affolée*). — Non ! Non ! C'est affreux !

LE MARQUIS. — Je ne puis croire le fils de mon frère capable
d'une telle infamie !

LE CHEF CHOUAN. — Et pourtant!... les preuves sont là! (*Il*

montre le papier.)

LE MARQUIS (*hochant la tête*). — C'est vrai !

LE CHEF CHOUAN (*insistant*). — Nulle personne n'a pénétré ici, hormis cet homme, donc, lui seul a pu laisser, par mégarde, traîner cet ordre !

YVONNE (*protestant*). — Je ne croirai jamais que Georges ait accepté une mission aussi monstrueuse !

LE CHEF CHOUAN (*insimuant*). — Mademoiselle, vous êtes bonne, et vous croyez les autres semblables à vous-même. Hélas ! les Patauds n'ont pas le cœur aussi sensible. Ignorez-vous comment les colonnes infernales ravagent nos campagnes ? Scienc nos arbres ? Brûlent nos maisons ? Incendient nos bourgs ? Aucune grâce n'est faite ni aux femmes ni aux enfants !

YVONNE (*implorante*). — Georges ! Georges ! Justifiez-vous ! Votre nom ne peut être sali par d'aussi horribles présomptions !

UNE VOIX (*faiblement, au dehors*). — A moi !

YVONNE. — Ecoutez ! J'ai cru entendre un gémissement !

(Un silence.)

LA VOIX. — Au secours !

YVONNE (*inquiète*). — Avez-vous entendu ? On a appelé !

LE MARQUIS. — C'est vrai ! Dehors, un homme se plaint et demande aide !

LE CHEF CHOUAN (*sceptique*). — Ce ne peut être qu'un piège, Monsieur le Marquis, un piège tendu pour vous attirer dans un guet-apens !

LE MARQUIS (*sursautant*). — Oh! croyez-vous?

LE CHEF CHOUAN. — Monsieur le Marquis, ces gens sont capables de tout! Oui, de tout! Aussi, connaissant votre courage et votre bonté, ils ont parfaitement pu imaginer cette mise en scène. (*Se grisant de ses paroles.*) Mais oui... je vois très bien... Tout d'abord... la fusillade!...

LA VOIX. — A moi!

YVONNE. — Ecoutez, on recommence à se plaindre!

LE CHEF CHOUAN (*avec un geste qui signifie qu'il sait fort bien ce qu'il dit*). — ...d'abord la fusillade... puis des plaintes... Pas de doute, aura-t-on pensé, le Marquis sortira, alors nous l'abattrons comme un chien!

LE MARQUIS (*fortement ébranlé*). — Vous croyez?

LE CHEF CHOUAN (*catégorique*). — C'est absolument certain! Monsieur le Marquis, ne sortez pas!

LA VOIX. — Au secours!

YVONNE. — Vous entendez! Il faut absolument faire quelque chose!

LE MARQUIS (*au chef chouan*). — Alors, allez-y, vous!

LE CHEF CHOUAN (*surpris et peu enthousiaste*). — Moi?

YVONNE (*se dirigeant vers la porte*). — Eh! bien non! Puisque les hommes sont trop faibles, c'est moi qui irai porter secours!

LE MARQUIS (*violemment*). — Yvonne! Je te défends!

YVONNE (*s'arrête et se retourne vers son père*). — Père! Vous n'avez pas le droit de m'interdire cela!

LA VOIX (*plus proche*). — A moi! Au secours!

YVONNE (*affolée*). — C'est la voix de Georges!

(*Elle ouvre la porte et se précipite au dehors. On l'entend s'écrier :*)

Ah! mon Dieu!

(*Puis elle réapparaît sur le seuil de la porte et s'adresse aux chouans :*)

Venez vite!...

(*Les chouans se précipitent à cet appel. Le Marquis s'approche de la porte et bientôt Georges paraît soutenu par Yvonne et un chouan. Un moment, dans l'encadrement de la porte, le visage éclairé par un flambeau qu'un homme vient de prendre sur la table, il s'arrête, debout, affreusement pâle, mais souriant.*)

SCENE XIV

Les mêmes, plus GEORGES

LE MARQUIS (*à un homme*). — Approche le fauteuil!

(*Un chouan avance le fauteuil où, doucement, on fait asseoir l'officier républicain.*)

YVONNE (*penchée sur son cousin*). — Où êtes-vous blessé?

GEORGES (*désignant sa poitrine*). — Là!

YVONNE (*dégrafant le manteau et le tendant à son père*). — Tenez, père!

LE MARQUIS (*prenant le manteau*). — Mais... c'est le manteau d'Alain!

(*Il aperçoit le chapeau à panache blanc qu'un des chouans a ramas-*

sé.)

Tu portais ce manteau et ce chapeau ?

YVONNE (*qui a ouvert la veste de Georges*). — De l'eau ! du linge !

GEORGES (*très doux*). — Merci ! Mais c'est inutile, je vais mourir !

LE MARQUIS. — Du moins, m'expliqueras-tu comment tu portais ce manteau et ce chapeau ?

(*Georges fait un signe négatif.*)

YVONNE (*toute en larmes*). — Mais, père, vous n'avez donc pas compris que Georges s'est sacrifié pour vous sauver ?

LE MARQUIS (*interloqué*). — Pour me sauver ?

(*Yvonne s'empare des linges qu'un chouan vient d'apporter et commence à panser la plaie de Georges. Le Marquis arpente la scène, cherchant une explication. Il s'arrête parfois et regarde son neveu.*)

YVONNE (*qui vient de bander la blessure*). — Oui, père ! pour vous sauver. J'ai compris l'héroïque sacrifice de Georges quand j'ai vu celui-ci se traîner péniblement au bas du perron. Il savait que les « bleus » étaient embusqués dans la grande allée du château avec mission de vous abattre, père, dès que vous franchiriez la porte. L'ordre que vous avez lu le disait clairement. Alors, Georges a pris le manteau d'Alain, coiffé son chapeau pour vous ressembler, ou, du moins, ressembler à un chouan. (*A Georges.*) C'est bien cela, n'est-ce pas ?

GEORGES (*faiblement*). — Oui, c'est cela !

LE MARQUIS (*très ému*). — A mon tour, je comprends tout ! Georges a voulu, en se sacrifiant, effacer l'opprobre de la mort

d'Alain, me prouver son innocence et montrer qu'il était toujours digne de nous. (*A Georges.*) C'est cela que tu as voulu ?

GEORGES (*faiblement*). — Oui, il ne fallait pas... qu'Yvonne pût croire... que j'avais... volontairement tué Alain!... Alain, que j'aimais... comme un frère !

YVONNE (*avec des sanglots*). — Georges ! Georges ! Si mon amour peut vous guérir, vous rendre la vie, sachez que je vous aime, que je n'ai jamais cessé de vous aimer !

GEORGES (*avec un douloureux sourire*). — Merci ! je savais bien que votre cœur était resté le même ! Mais Alain était entre nous... et, il fallait... une victime ! J'ai préféré que ce soit moi plutôt que notre amour !

(*Yvonne se précipite aux genoux de Georges en pleurant.*)

LE MARQUIS (*très ému*). — Chapeau bas, Messieurs, celui-là est bien de la famille ! C'est un vrai Kernevez !

GEORGES. — Bénissez-moi, mon oncle !

LE MARQUIS (*élevant la main*). — Je te bénis, mon fils !

(*Le marquis va chercher le drapeau blanc, tandis qu'Yvonne est effondrée auprès de Georges qui caresse doucement les cheveux de sa cousine.*)

GEORGES. — Ne pleurez pas, Yvonne... certes, je vais mourir... mais je mourrai heureux... d'avoir retrouvé... une famille, un père... une fiancée... Ah ! comme je me sens bien ainsi ! Je ne souffre plus, on dirait, au contraire... qu'un bien-être m'envahit... comme c'est étrange !

(Le Marquis approche le drapeau blanc du moribond et lui tend la soie pour qu'il l'embrasse.)

GEORGES *(de plus en plus faiblement)*. — Il n'a qu'une seule couleur... votre drapeau... Le mien en a trois. *(Il regarde autour de lui, détache le fichu bleu d'Yvonne et l'attache au drapeau blanc.)* Une couleur manque... encore!... Ah!... peut-être... *(Il fouille dans sa poitrine et en retire le mouchoir de la bien-aimée, le mouchoir tout ensanglanté... superbement rouge. Il l'attache à côté du fichu bleu et sourit aux trois couleurs. Puis il saisit la main de sa cousine, la baise dévotement, se dresse, brandit l'étendard improvisé, pousse un dernier cri :)* Vive la France!

(Il s'écroule, drapé dans la chère loque tricolore.)

RIDEAU

[西注]

* テキストではこの) が脱落している。

** テキストでは cours となっているが、明らかに coups の間違いゆえ訂正しておく。